
サイオニクス～～psionics

ティーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイオニクス → psionics

【NZコード】

N7264E

【作者名】

ティーズ

【あらすじ】

異世界…それは、誰もが一度は憧れ、夢見た世界…。人々はそこに幾つもの夢を見る。富、名声、金、英雄としての自分…。…だが、そこに行ける事は本当に幸せなのか？夢なのか？様々な想いを胸に人々は想い焦がれてゆく…。異世界…それは人々の想いが創りだした世界…。そこは、希望と夢に満ちた世界なのか…それとも…悲しみと憎悪に包まれた世界なのか…それはまだ…分からぬ…。

プロローグ

その昔、世界は一つに割れていた。

一つは、三人の神々が住む天上界、もう一つは、何も存在しない無の世界である…下界。

神々は毎日、美しい歌や詩を書き、それは楽しい日々を過ごしていた。

そんなある日の事だった。

暇を持て余していた一人の神が何かを創つてみようと、下界に地と森、そして動物を創つた。

それを見た二人目の神は、ならば私もと、海と空と魚を…それぞれ、創つた。

二人の神が創造物を創つてから、数十年の時が経つたある日の事だつた。

その日も、二人の神は自分達が創つた動物や魚を見たり、いたずらをしては楽しんでいた。

すると、三人目の神が二人の神にこう言つた。

私も何か創つても良いでしょうか?

その問い合わせ一人の神は快く了承し、その創造を心待ちにした。

そして、三人目の神は下界にばらまいた……人間という名の創造物を
……。

それから、数百年の年月が経過した。

その日、二人の神は人間を創った神を責めた。

貴様が創った人間と言う創造物はなんと愚かか。

我らが創った動物や魚を殺しては喰らい、森や海を汚す。

そして時には、人間同士で争いをする。

存在する価値など無い。

即刻、人間を根絶やしにしろ。

二人の神のその言葉に驚いた三人目の神は二人の神を説得した。

人間にはまだまだ学ぶべき事が沢山あります、どうか、考え方直して
下さい。

しかし一人の神は聞く耳を持たず、貴様がやらんのなら我らが人間
を根絶やしにしてくれると言い下界へと降りて行つた。

それを見て、慌てた三人目の神は一人の神の後を追つて下界へと降り立つた。

対立する三人の神…。

もう、言葉は何の意味も持たなかつた…。

戦う事でしか…止める事が出来ないのだ。

三人の神々は戦つた。

それぞれの守るべきものを守る為に…。

そして、五百年の月日が流れた…。

第一話・呼び声（繪書き）

皆様に楽しんでもらえたたらと願こまく。

第一話・呼び声

春の心地良い風が吹く午後、一人の少年が学校の裏でうたた寝をしていた。

校舎から聞こえる声を聞く所によると今は昼休みなのだろうか、男女の騒ぎ声があちらこちらから聞こえていた。

「ん……ん……」

だが、少年はそんな事にも気にせず熟睡していた。この少年、弥蒼時雨は、この市立高校に通う一年生の学生である。時雨はいつもの日課である昼寝を、天気の良い日はいつもして外で過ごしているのだ。

「すう……すう……」

幸せそうな表情で眠る時雨……と、その時ガシャンというフェンス音が辺りに響いた。

「…………ん?…………」

突然の音に時雨は眼を擦りながらムクリと起き上がり辺りを見渡した。

すると、少し先の方のフェンスに数人の女子生徒が一人の女子生徒を囲んでいるのを発見した。

(…カツアゲか何かか?…関わると後々面倒な事になりそうだな…)

そう思い、その場を離れようと歩き出した時雨の横を一人の女子生徒が走り通った。

(…?…あいつは…)

時雨はその場に立ち止まると、女子生徒が走り去った方を見た。

その女子生徒は先程の女子生徒達の群の所へ行くと間に無理矢理、割つて入った。

「んだよ、あんた!」

「邪魔なんだけど!」

途端にあちらこちらから罵声が飛び交う。

「うつさいわね！一人の子に寄つてたかつて虚めてるあんたらにギヤーギヤー言われる筋合いなんか無いわよ！」

しかし、女子生徒はその声を上回る程の大きな声で叫び、女子生徒達を黙らせた。

「だいたいね！あんたらは…」

「はいはい、そこまで」

女子生徒が何かを言おうと口を開いた瞬間、一人の男子生徒が現れた。

「げ、あいつ生徒会の玖潟じゃん」

「…チツ、行くよ」

その言葉を合図に女子生徒達は校舎へと走った。

「もう、玖潟先輩！せつかくあたしが…」

「あー、はいはい。悪かつたよ」

玖潟と呼ばれた生徒は両手を上げながらそう言った。

「で、そっちの彼女は大丈夫なの？」

「あ、そうだった」

女子生徒は慌てて後ろにいる女子生徒に声をかけた。

「あなた、大丈夫？」

「…あ、はい。…大丈夫、です」

「そう、良かつた」

女子生徒は安心すると手を差し出し、女子生徒を立たせた。

「あの、その…あ、ありがとうございました。その、助けて頂いて」「ん？ いいつて！ 困つた時はお互い様よ」

女子生徒は笑顔でそう言った。

「…茶番だな」

端からそのやり取りを見ていた時雨はボソリと言いつつその場を去ろうと、足を進めた時だった。

《…時…満ち…》

時雨の頭に誰かの声が響いた。

(……”またか”…今日は、はつきりと聞こえ…)

『…門…繫が…異界…れん』

(…クツ…何だ、目眩が) その瞬間、時雨の視界がグニャリと歪み、倒れ込んだ。

こつからだるい…あの声を聞いたのは…。

遠いよいで近いよいで感じるあの声を…。

そして、どこか懐かしく感じる…あの声を…。

……いつからだらうか…。

「…きて…きてよ」

(…誰だ?)

「起きなさいってのー!」

「…ひるさい」

揺わ振られた事で起きたのか、時雨はゆっくじと眼を開け、上半身を起こした。

「つるさことは何よーまつたぐ。でも、まあ良かつたわ、眼が覚めないかと思ったわよ」

(確かに…また、あの声を聞いて…それで…)

「ねえ、大丈夫なの?」

女子生徒の声に時雨はそちらに顔を向けた。

そこには、先程の一人の女子生徒と玖瀬と呼ばれていた男子生徒がいた。

「大丈夫かい? 顔色が余り良くないみたいだが」

「あ、ああ…大丈夫だ。すまない、迷惑をかけた」

「あ、ちょっと…」

時雨は立ち上ると女子生徒の制止も聞かずゅくつとした足どりで校舎に戻つて行つた。

「つたく、もう」

次の日、校舎裏で寝ていた時雨の元に昨日の女子生徒が一人來た。

「…ん？」

その気配に気付いたのか時雨が起き上がつた。

「あ、起きた？」

「…何の用だ」

「ん~、まあ、そんなにたいした事じゃないんだけど。昨日、倒れだからやつぱ心配になつてさ」

「何だ…そんな事か。大丈夫だ、心配する程じゃない」

「そう、ならいいけど。…あ！そうだ、ねえ、いつもやつて知り合つたのも何かの縁だと思うの！だから、互いに自己紹介しようよ」

「……」

女子生徒の唐突な言葉に時雨は呆気にとられた。

だが、そんな事は知つてか知らずか、女子生徒は話し始めた。

「わたしは一年の羽原葵。こっちが…」

葵はそう言って隣にいる女子生徒の方を見た。

「あ、あの、同じく一年の深嶋華音です。えつと、その…よろしく

お願いします」

それに気付いた華音は、おどおどしながらも自己紹介をした。

「それで、あなたは？」

「…俺は…弥蒼時雨だ」

時雨は葵の質問にため息混じりに答えた。

第一話・異の世界

朝の日差しがそそがれる部屋の中を田原ましの音が鳴り響いた。

「……わー」

時雨はもぞもぞとベッドから手を伸ばし音を切った。

「……ひ、ん……朝か」

時雨はめりくつとした動きでベッドから降り、コンピングへと向かつた。

コンピングのテーブルの上にはパンが一つぽんじてあり、一つは口ぐ、一つはカバンの中ぐと無造作に突っ込むと、時雨は身支度を整えた。

「……じや、行ひてきます。父さん、母さん、」

部屋の一角にある小さな仏壇の前で、やつぱり時雨はマンションを出た。

昼休み、校舎裏でパンを食べていた時雨の所に、葵と華音。そして、この間、玖鴻と呼ばれていた少年が歩いてきた。

「ヤッホー」

「こ、こんにちは」

だが、時雨の反応は薄く、むじろひきぞつした様子だった。

「……はあ」

「何よ、そのため息は。せつかく、来てあげたのに」

「頼んだ覚えは無い」

葵の言葉に間髪入れずに時雨は答えた。

「はは、面白いね君」

すると、一人傍らでそのやり取りを見ていた玖鴻が笑いだした。

「……誰だ?」

「あ、そうだったね。僕は生徒会で書記をやっている、三年の玖鴻

『鷹紀って言つんだ。よろしく』

時雨の田の前に鷹紀の手が差し出された。

「……」

「はは、何でつて顔をしているね。実は昨日、羽原君に言われてね。あんな風に知り合つたのも何かの縁だから、自己紹介でもして、お互いを知つたらどうだつてね。だから、ほら」

鷹紀はもう一度、時雨の前に手を差し出した。

「……はあ……時雨だ。……弥蒼時雨」

小さなため息をつき、時雨は手を握った。

それから数分後、校舎裏には時雨達四人の姿があった。
しかし、そんな中でも時雨は他の三人の会話には参加せず、眠つていた。

「えへ、ホントかなそれ」

「ホントですって！確かに見たんですよー！」

「で、でも、本当なら凄いですよ」

「だよね！」

すると突然、時雨が起き上がつた。

「……うるさくて寝れるか」 そう言つと時雨は立ち上がりその場を離れて行つた。

「……悪いことしたかな」

「そう、みたいですね」

「追いかけよっか

葵の言葉に一人は頷くと、急いで時雨の後を追つた。

『強盗ですって』

——うるさい——

『子供が奇跡的に助かつたらしいわ』

——止めろ——

『かわこわい』

——俺を見るな——

「つ……」

突然、時雨はその場に倒れ込んだ。

(くつ、なんだって今更…。それに、今の頭痛は一体…)

「ぐつーっ？」

瞬間、強烈な頭痛が瞬間を襲った。

『お前は疫病神なんだよーー』

(だ、黙れ…)

『あんたなんか産まれて来なければよかつたのにー』

「……つる……そこ」

『俺の視界に入るなーー』

「ぐつー…まあまあ…くそつー」

『誰が助けてつて、頼んだんだよ』

「…ぐー…ああああーー！」 時雨は頭を押さえ、絶叫した。
(くそつ、もう忘れたんだ！過去の事なんだ！割り切ったんだ！だ

から、出て来るなーーー

時雨の視界がどんどんと歪み霞んでいった。

「時雨ーーー」

その時、葵達が時雨の元へ駆けつけた。

「大丈夫かい？ 物凄い汗だけど…」

「あの、ど、どこか痛むんですか？」

「…俺に… かまうな

心配そうに声をかける一人を振り払うと時雨はゆっくり立ち上がりつつした。

「つ…

「ちよーっ！」

慌てて時雨を支える葵。『…は来た…今…』

「くっ！」

時雨の頭の中に鼓が響く。

(また、なのか…)

《さあ…来い… 我が…》

(お前は、一体…誰…なん…だ…)

やいで、時雨の意識は途絶えた。

「…きて…起きて…」

「…つ…うう

「…ひ…起きなさいってーーー」

バチンという音が響いた。

「…つ

頬を摩りながら時雨は起きた。

「たくつ。この非常事態でよく寝てられたわね

…?…どういう意味だ

周りを見れば分かるわよ

葵の言葉に時雨はゆっくりと辺りを見回した。

辺りには沢山の木々があり、そこはどう見ても森だった。

「…何故こんな所に…。俺達は学校にいたはずだが」

「そう、あたし達はさつきまで校舎裏にいたはずなの。なのに、気がついたらここに…。今、華音と玖瀬先輩が辺りの様子を見に行つてるわ」

「…あいつらもか?」

「ええ、あたし達四人。知らない間にここへ連れて来られたみたいね」

葵の話を聞きながら時雨は、もう一度辺りを見回した。

(眠っていた時間からして、そう経っていないはずだ。だとすれば、学校近くの森か?いや、あの学校は街中にある、だから周辺に森なんてない…ならば、ここはどこだ?…そうだ、携帯を)

時雨はおもむろにポケットから携帯を取り出した。(時刻は…十時半過ぎ…。という事は、あれから五分と経っていない!?)
すれば、ここは一体どこなんだ…)

第二話・遭遇

同時刻、とある城の謁見の間で会話は行われていた。

「先程、不思議な光が北の森に現れたという報告があつたが、どうなつた？」

高価そうな服に身を包んだ男が田の前にいる鎧に身を包んだ男に問い合わせた。

「は、三番隊を調査に向かわせましたので、あと数分もしないうちに報告が来ると思われます」

男は床に片膝を着き頭を下げて言った。

「どうか。……娘のカティと我が妻フィルナはどうした？」

「は、お一方共、お庭の方にいらっしゃいます。お呼び致しますか？」

「いや、よい。……なあ、ローレグよ」

「はい、なんでしょうか王」

「…つまらん」

「は？」

ローレグと呼ばれた男はつい間抜けな声を出してしまった。

「最近、祭」とも何もないからのお。なにか面白い事はないものか」「はあ、そう申されましても」

「まあ、その三番隊の報告を待つとするかのお。何か面白い事だといのだが」

王は顎に生えている白い鬚を摩りながらひたすら言った。

「駄目だ、この先は崖になつてる」

「ほ、他の場所はまだまだ森が続いているようですが、とてもじゃないですけど行けそうにありません」

探索に行ってきた鷹紀と華音の言葉に葵は落胆した。

「じゃあ、どうするんです？このまま、助けが来るのを待ちます？」

「うん、下手に動くよりはその方が良いのかもしれないね」「あ、あの弥蒼さんは？」

「ん？ ああ、あいつならそー」

葵が指す一本の木。

その影で、時雨は寄り掛かりながら何かを考えていた。

「時雨君！ 君もこっちは来なよ」

「……」

「や、弥蒼さん！ ひ、一人は危険ですよ」

「……」

「早くこっちはに来なさいよー。」

「……はあ」

三人の呼びかけにため息混じりに起き上ると、三人の元へと歩こうとした。その瞬間、四人の周りの木々の間から数人の兵士と二人組の男女が現れた。

「ちょっと！ 何、この人達！ ？」

「これは！ 一体！ ？」

いきなりの事態に驚く葵と鷹紀、華音に至っては余りの事に声も出せないでいた。

「ラルラ隊長、ご指示を」 先程の二人組の男の方が女の方に言った。

「ああ。一応、縄で拘束。後は城に連行して王の指示に従おう」「了解しました。おい」

男が手で捕まえるよう指示をすると、兵達は時雨達をに迫った。
「くつ、こんな所で訳も解らない連中に捕まるもんかあ！」

突如、葵が兵達に突っ込んだ。

『！ ！』

いきなりの事に怯んだ兵達。

葵はその隙を狙つて一人の兵に掴み掛けた。

右手は胸倉へ、左手は右手首を掴み、右足で腹の部分を蹴り上げた。

「ぐえ」

兵士はそのまま中を一回転すると地面に叩きつけられた。

「巴投げ！？」

「た、確か、葵ちゃんのお母さんって柔道の師範をやつているって鷹紀の驚きに華音は答えた。

「三人共！邪魔になるからどつかに隠れていって……」

「で、でも、葵ちゃん一人じゃ……」

「華音君、今は葵君の言つ通りにするんだ。ここにいても邪魔になるだけだ」

鷹紀はそう言いながら華音を連れて物影に隠れた。

「何をしている早く捕らえろ！」

男の声に反応し、兵達が葵に迫る。

しかし、それでも葵は怯まず、一人一人難ぎ倒してゆく。

「……凄いな」

物影からその様子を見る鷹紀も驚きを隠せずにいた。

「あ、あの、玖潟先輩！」

「……なんだい？」

不意に華音が鷹紀を呼んだ。

「その、弥蒼さんが……いないんです。どこにも……」

「まさか、どこかに逃げたとか……」

その言葉を聞いた瞬間、鷹紀の脳裏に不安が過ぎつた。

「がつ！」

その時、葵のぐぐもつた声が聞こえた。

「葵ちゃん！」

「しまった！！」

焦る一人。

その一人の前に、数人の兵士が現れた。

「おとなしくしろ！」

剣を喉元に突き付けられた二人は腕を後ろで縛られ、葵の所へと連れて行かれた。

「葵ちゃん、大丈夫！？」　華音の心配そうな声に、葵はうんと一言頷いた。

「よし、では、その三人を城へ連行する」

男はそう言い、兵達を引き連れ歩きだそうとした。だが、女の方は動く事はなく、その場に立ち止まっていた。

「ラルラ隊長、どうかされましたか？」

兵士が数人、駆け寄った。

「…いや、確かもう一人いたような気がしたんだが…。気のせいかな？」

そう言い、ラルラと呼ばれた女もその場を去りつつと後ろを向いた時だった。

「！」

何者かの気配をラルラは感じ取り、後ろを振り向いた。

すると、ラルラのすぐ後ろに時雨が頭を摩りながら立っていた。

(このアタシが背後を取られた！？)

襲つてくる気配は無かつた為、身構える事はしなかつたラルラだが、その表情は驚きに満ちていた。

「時雨！今までどこにいたのよ！」

「…そここの兵隊みたいな奴らがいきなり現れた時に押し倒されたんだ。そしたら、そこにあつた木に頭をぶつけて…悶えてた」

葵の声にあつらかんとした態度で時雨は答えた。

「で…これは、どういう事態なんだ？」

「コブが出来た場所を摩りながら時雨は辺りを見回した。

(あー、なるほど…)

捕まっている三人、囮まれている自分、それを見て理解したのか、

時雨は両手をラルラに向けて差し出した。

「ん？何、捕まえていいって事？抵抗しないの？」

「…めんどくさい。それに、これだけの数を相手にして勝てるわけがない」

時雨の言葉にラルラは何故か唸り始めた。

「隊長？」

その様子を見て不思議に思つたのか、一人の兵士が近寄つて來た。

「……よしつ！」

「うわつ！？」

すると突然、ラルラは額き時雨を指差した。横にいた兵は驚き、その場に尻餅をついた。

「お前、アタシと戦え」

「……は？」

いきなりの事に時雨や周圍にいた兵達も呆気にとられた。

「ラルラ隊長！？」

しかしそんな中、葵達の近くにいた男が兵達を搔き分け、ラルラの元へと歩いて來た。

「何だよ、クラルト」

その姿を見るや否や、ラルラは迷惑そうな表情をした。

「何だではありません。一体、何を考えているのですか！！」

クラルトと呼ばれた男は声を張り上げてラルラを叱つた。

「うつさいな。いいだろ隊長のアタシが決めた事なんだから」「隊長なら隊長らしくもっと状況を見て判断してもらわないと。だいたい、ラルラ隊長は…」

「あー！もう！だから、うるさいっての！隊長のアタシが決めたんだから、副隊長のアンタにガミガミ言われる筋合いはないの！分かつたら、おとなしくアタシの指示に従え！」

「……はあ…分かりました」

クラルトはため息をつき、先程いた葵達の近くまで戻つた。

第四話：力

辺りの木々が揺れ、鳥達が騒ぎだした。

「逃げんな！」

ラルラの拳が時雨の頬をかすった。

「このつー」

続けてボディーへのアッパーが繰り出されるも、時雨はバックステップで避けた。

「……なあ、もういいだろ？」

ため息混じりに時雨はラルラに聞いた。

「言い訳が、ないだろっー！」

ラルラの怒り狂った叫びと共に幾つもの拳と蹴りが飛び交った。

「お前のその腐った根性、叩き治してやるあーーー！」

「……頼んだ覚えがない」

全ての打撃をかわしながら時雨はボソリと呟いた。

戦いが起こる数分前。

「さてと、邪魔者もいなくなつたし……やううぜ」

ラルラは指の関節を鳴らしながら時雨の方を向いた。

「……ふあ」

しかし、当の本人は全くやる気がないのか、欠伸をし始めた。

「おいつー」

時雨の余りのやる気のなさに、ラルラは叫んだ。

「……？」

「なんだ、そのやる気が一切感じられない欠伸はつーー男なりもつ
としゃきっとしそーーー！」

「……で？」

時雨のその一言にラルラがキレた。

「お前なあ……その、やる気のねえ根性を叩き治してやるーーー！」

ラルラが時雨に殴りかかった。

そして、その戦いが始まって數十分が経っていた。さすがに、周りにいた兵達も驚きを隠せなかつた。今、あの少年が相手をしているのは、自分達の隊の隊長のはず…。

なのに、何故あの少年に一度も当たらないのか…何故あの少年はあんなにもかわし続けられるのか、と。

そしてそれは、クラルトも同じだつたのだろう、たまらず葵達に聞いた。

「あの少年は一体なんなんだ？」

「何つていわれても…」

「僕らが知りたいくらいですよ」

葵達の表情も又、驚きに満ちていた。

「だが、キミらと彼は知り合いだろ？ だつたら知らない訳がないだろ？」「

「し、知り合」と言われましても…」

「あたし達が時雨と知り合つたのは、つい最近だし…ねえ」

同意を求めるかのように、葵は鷹紀の方を向いた。

「ええ、そうです。それに、僕達だって驚いているんですよ。いろいろ事にね…」

一方、その頃…時雨達二人はと言つと…。

「なあ、なんであんた俺に戦えなんて言つたんだよ」 今だに戦いが続いていた。

「はあ！？お前の根性を叩き治す為！だろ！つ、が！」

「それ、は、今、の理由だろ？最初の理由だ、よ」

殴るラルラ、避ける時雨。

それは、次第にラルラのイラつきを高めていった。

「最初の理由だあ？んなもん、忘れたわッ！！」

ラルラの渾身の一撃が放たれた。

「…無責任だる」

しかし、時雨はそれを軽く避けるとラルラとの距離をとった。

「…だいたい、あんたと戦つて何のメリットがある…」

そう言いながら時雨がラルラの方を見た瞬間だつた。

時雨のすぐ目の前にラルラが右腕を振りかぶっていた。

「いけない…！避けるんだ…！」

その時、クラルトが時雨に叫んだ。

「…つ…！」

時雨自身も危険だと感じ取ったのか、今までより遙かに速い反応速度でそれを避けた。

そして、ラルラの右手の平が時雨の後ろの木に当たつた。

瞬間、その木は吹き飛んだ。

森の奥の奥へと、周りの木々を薙ぎ倒しながら。

「隊長…！」

瞬間、クラルトが叫びながら焦つた様子でラルラの元へと駆け寄つた。

「一体、何を考えているんですか！ただの少年に向かつてプシュケを使うだなんて…！」

「いや…、つい」

詫びられた様子も無いラルラにクラルトは怒りをあらわにした。

「つい、じゃありません！一歩間違えば、あの少年を大怪我させていたのかもしれないんですよ…！分かつてるんですか…！」

「わ、分かつたつて…悪かつたよ」

クラルトの怒鳴り声に焦つた様子でラルラは謝つた。

「だいたい貴女はいつも…」

だが、それでも許す様子の無いクラルトはラルラを説教し始めた。

「ねえ、あのクラルトって人が言つてたプシュケって…あれ？」

端からそのやり取りを見ていた葵は、先程ラルラが吹き飛ばした

木の方を指した。

「多分… そうだと思うけど…。ブシュケって… いつたい…」
考え込む鷹紀に華音がこっそりと話しかけた。

「あ、あの… 皆があの一人に気を取られている隙に…に、逃げませ
んか？」

華音のその提案に葵は大きく頷いた。

「そうだよ、今がチャンスだよー行こつ！」

「は、はい」

「ひつそりと逃げ出そうとする一人だったが、その腕を鷹紀が掴んだ。

「玖潟先輩？」

不思議そうな眼で葵は鷹紀を見た。

「今、ここから離れるのは止そつ

「な、何ですか？」

鷹紀の言葉に華音は問いただした。

「今、僕らは何も分かつていいない。ここがどこなのか、日本なのか
日本以外のどこかなのか。その為にも、情報が必要なんだ」「
「その為に、あんな得体の知れない連中について行くつての！」

「他に方法があるか？」

「時雨！？ 何で、あんたがここに？」

時雨のいきなりの登場に葵達は驚いた。

「…あれだけ口論していれば、見つからずに来れる。それに、兵達
もあの二人を抑えるのに必死で、こっちに気付いていなかつたから
な」

時雨は淡々とした口調で喋った。

「でも、だからって… あんな連中に…」

「葵君、今、僕らが欲しいのは情報だ。情報が無ければ何も分から
ないし、行動も出来ない。なら、少し危険な賭けかも知れないが、
彼らについて行くしかないんだ」

鷹紀の説得に葵は渋々頷いた。

「華音君もいいかな？」

「あ、はい。大丈夫です」

「悪いね、せつかく提案してくれたのに」

「い、いえ、いいんです」 少しうれしそうな表情をしながら華音は答えた。

「さて、じゃあ…まずは、あの一人を止めて…」

そう言い、鷹紀は先程一人がいた方を向くと、目の前にラルラとクラルトの二人がいた。

「うわっ！」

驚く鷹紀。

「何だよ、化け物を見たような反応しやがって」

「まあまあ、隊長。君達の会話は少しだが聞かせてもらつたよ。ついて来てくれるなら話は早い、君達を案内するよ。我らが王の住む城、ファヌエル城へ」

登場人物・その一

名前 弥蒼 ヤソウ

時雨 シグレ

性別 男

年齢 17

血液型 A

異世界へ飛ばされた少年達の一人であり、本編の主人公。凶太い神経をしており、異世界へ来た時も余り動じておらず、直ぐに割り切り受け入れた。

本人言わく、過去をどうこう言おうが元には戻らないから、だそ
うだが…。

一番楽な生き方をしている為、物事には深入りせず、傍観者でいる事にしている。

導体視力が常人よりかなり優れている。

名前 羽原 ハバラ

葵性別 女

年齢 17

血液型 O

異世界へ飛ばされた子供達の一人。

父親が刑事をしている事もあり正義感がかなり強い。

だが、突つ走ると周りが見えなくなり、ピンチに陥る事もしばしば…。

母方の祖母が柔道の師範、母親が薙刀の師範の為、かなり強い。

名前 深嶋 ミシマ

華音 カオン

性別 女

年齢 17

血液型 O

血液型 O

異世界へ飛ばされた子供達の一人。

心優しく、人と戦つたり、殺したりする事にかなりの抵抗を持つている。

看護の仕事に就きたいと思っているので、簡単な治療ならば出来る。

名前	玖潟	クカタ
性別	男	
年齢	18	
血液型	A B	

異世界へ飛ばされた子供達の一人で、四人のリーダー的存在。

人柄が良く、四人にはかなり信頼されている。

頭の回転が速く、状況判断に優れているものの、何故かそれ以外のものには疎い。

戦う事に対して多少の抵抗がある。

第五話・始動（前書き）

更新遅れて、「めんなさい。大学が忙しくて…。すみません、言い訳です。頑張ります、はい…。

第五話・始動

ファヌエル城、謁見の間。

そこに鷹紀達はいた。

「本当にお城だよ…」

「そ、そうですね」

驚きの表情で辺りを見回す葵と華音。

「……」

鷹紀にいたつては余りの事に言葉も出なかつた。

あの後、クラルトに案内された時雨達はこの城へとやつて來た。

その道中、彼らは戸惑いを隠せずにいた。

それもそのはずだらう、彼らが通つて來た道…。

そこは、日本のどこを探しても存在するはずの無い町並みや建物、人々の服装、場所だつた。

家は木やレンガを主とした物や石造りの物、人の服に至つては自分達と似たような物だが、どこか民族衣装に近い感じのもの。

だが、それよりも驚いたのはこの街の周りだつた。それは、街の周りに巨大な城壁があるといつ事に他ならなかつた。

「…何よ…ここ」

葵がやつとと言つ感じで声を搾り出した。

「ここは、アイテール大陸にあるトラヴァス国…」

「そうじやないくて…！」 クラルトの声を遮り、葵は叫んだ。

「…日本…日本じゃないの…」

「…ホン、て何だ？」

「日本は僕らがいた国の名前です。知りませんか？」

「さあ、アタシはそういうの全くだからな」

ラルラは首を傾げ、クラルトを呼んだ。

「お前、二ホンって国知つてるか？」

「二ホンですか…。いえ、聞いた事の無い名前の国ですが」「だつてよ」

「そうですか…」

落ち込む鷹紀の服を葵が引っ張った。

「あたし達これからどうなるんですか…」

不安げに言う葵を見て、鷹紀も顔を曇らせた。

「く、玖潟先輩」

不意に華音が鷹紀を呼んだ。

「どうしたんだい？」

「し、弥蒼さんが…倒れそうになつてます」

「は？」

華音の言葉を聞き、慌てて後ろを振り向くと、兵に肩を貸してもらいながら、今にも倒れそうな足取りで時雨が歩いていた。

「あんた、大丈夫なの！？」

「時雨君！」

慌てて駆け寄る葵達だが、時雨はそれを右手で静止させた。

「…大…丈夫…だ」

兵士の肩から腕を退かし一人で歩き出そうとする時雨。

「や、弥蒼さん」

「俺に…かま、うな…」

だが、その足に力は無く時雨はその場に崩れる落ちるように倒れ意識を失った。

扉の開ぐ音が鷹紀達のいる間に響いた。

「待たせたのぉ」

その音に葵達は後ろを向いた。

そこには、高価なそうな服や装飾品に身を包んだ一組の男女が数人の兵を周りに囁えながらいた。

二人はゆっくりとした足取りで歩くと、葵達の前を過ぎ、階段を少し上ると椅子に座った。

「さて、ではまず名を聞こうかのよ」

男は顎の髭を摩りながら言った。

「あたしは、その…えと、羽原葵です」

「え〜、あの…玖潟鷹紀と言います」

「み、深嶋華音です」

緊張した声で話す三人に一人は笑った。

「はつはつは、そんなに緊張せずとも良い」

「そうね、別に取つて喰う訳じゃないんだから」

にこやかに話す二人を見て緊張が解けたのか、三人は、ふうと息を吐いた。

「ワシはこのファヌエル城の王、ヴァロン・カル・ディーネじゃ」

「私は妻のフィルナ・ロル・ディーネ。あと、娘のカティアがいるのだけど、あの娘どこに行つたのかしら？」

「あ、あの！」

フィルナが辺りを見回していると、不意に鷹紀が叫んだ。

「その、時雨君は大丈夫なんですか？」

「おお、そうじゅつたな。あの少年なら医者に見せると、大丈夫じや」

や

ヴァロンのその言葉を聞いて葵達は安堵の息を吐いた。

「では、次はこちらの質問に答えてもらおうか」

「あ、はい」

ヴァロンの真剣な声に鷹紀は少し緊迫した表情になつた。

(ここは、僕が話をするよ)

鷹紀の言葉に一人は静かに頷いた。

「まず、主らがどこから来て、何の目的で来たのかを聞きたいのだが…」

ヴァロンはそう言つと一人の兵から一枚の用紙を受け取つた。

「こう言つたケースは初めてじゃからなあ」

「僕らもです」

「そうじゅるうな。三番隊の報告書にもそう書いてあつたわい」

用紙を近くの机に置き、ヴァロンは更に問いただした。

「主らも分からないと書いておつたが本当か？」

「あ、はい。僕らも気がついたら飛ばされていて、あの森にいました」

「ふむ、姿を見るまで半信半疑だつたが、その服装や表情を見る限り嘘偽りではないようじゃな」

それは癖なのか、ヴァロンの手が再度、顎の鬚へと伸びた。

「僕らも最初は信じられませんでしたよ。けれど、あれを見れば誰でも信じるしかありませんよ。僕らの世界の住人ならば……」

「そうか、そういうえば、あれは君らの世界では一つだつたらしの」

「ええ、まさか……太陽が一つあるなんて思いもしませんでしたよ」「あの太陽は、一つは西から東へ、一つは南から北へ動いているのじゃ」

「そうですか、僕らも森にいましたからね。出た時はさすがに驚きましたよ……」鷹紀の表情は暗く、どこか悲しげだった。

「でも、あれではつきりとしました。ここが……僕らのいた世界ではない、違う世界……異世界だと」

その言葉に、葵と華音は顔を伏せた。

今ここにいる事が嘘や夢ではないといつ事、現実だといつ事を打ち付けられた瞬間だつた。

「……君らはこれからどうするつもりじゃ？」

不意にヴァロンが喋った。

「あ、はい……街で何とか働き口と宿を探して、元の世界に帰る方法を探そうと思います」

すると、ヴァロンは髪を摩りながら唸り、口を開いた。

「城で働く気はないかのお」

「は？？」

瞬間、鷹紀達三人は間抜けな声を出した。

「どうかのぉ、フィルナ」

「あら、私は構わないわよ」

「だ、そうだが。どうする？むうん、働きながらじゅが
い、いいんですか？」

再度、確認するかのように鷹紀は問いかけた。

「条件付きじゃがな

「条件？」

その時、扉の開く音が聞こえ、時雨と一人の女性が現れた。

第六話・悪夢（前書き）

えへ、ヤバイです。今月中に後一話は更新したいです。

第六話・惡夢

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

俺は、
体

止めてくれーーーーー

——謙たる言ふて何を言つてゐるんだ——

お願い
助けて…

一 僕は とシテ てゐる所

卷之二

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

— 1 —

卷之三

卷之三

——父さんと幽かんから漏れ出了た血?——

——俺から出た血?——

——俺が……殺した？ 父さんと母さんを？

——俺が……俺が……殺し……俺があああ……

——「わああああああああああ……」

「……」

突如、時雨は起き上がった。

「はあはあ」

顔は真っ青になり、背中は汗でびっしょりになっていた。
(今は……俺の……)

「くつ」

瞬間、時雨の田の前が歪み、ベットから落ちた。

「危ない!!」

バタンと扉の閉まる音が聞こえ、一人の女性が飛び込み時雨を支えた。

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ」

時雨は女性の手を退かすと、ベットに腰掛けた。

「ここは?」

「ここはファヌエル城の医務室ですよ」

時雨の質問に女性はこいやかに答えた。

「…ファヌエル城?」

「はい。貴方はここに来る道中に倒れたので、兵達が運んだんです。覚えていませんか?」

「…いや、覚えていないな」

「そうですか。でも、無事で良かつたです」

「…ああ」

軽い返事をし、ベットを下つけた時雨だったが、自分の上半身が裸だと気付き慌てて布団を体に巻いた。

「…貴様、見たか？」

「？」

「見たかと聞いているんだ」

「何をですか？」

「…いや、見ていないならい」

そう言い、立ち上がろうとする時雨を見た女性は悟ったのか、部屋をそそくわざと出て行つた。

「…」

部屋の壁に掛けであつた制服を手に取ると、時雨はシャツと上着に袖を通した。

力チャヤリと叩きアドアの開く音がすると共に、時雨が医務室から出て来た。

「あら？ 着替えは終わりましたの？」

「…居たのか」

「はい、貴方を皆様がいる所に案内するので」

「…分かつた」

「では、行きましょう」

女性は歩きだし、その後に時雨も続いた。

すると、その前方から一人の兵が小走りで寄つて來た。

「あ、姫…どこに行つておられたのですか！ 謁見の間で王と妃がお待ちです」

「…姫？」

兵の言葉に時雨は頭を傾げた。

「あ、申し遅れました。私、この城の王ヴァロンと妃フィルナの娘、カスティア・リル・ディーネと申します。カティアとお呼び下さい」

カティアは深々と頭を下げた。

「…ああ」

だが、そんな中でも時雨は大して驚いた様子も無く、歩き出した。

「時雨さん！」

そんな時雨をカテイアは引き止めた。

「？…何だ」

「そちらは…皆さんが居る部屋とは逆の道ですが…」

「……」

無言で来た道を戻る時雨を見て、カテイアは笑みをこぼしきり歩き始めた。

謁見の間にカテイアと時雨の足音が響く。

「カテイア。あなた、今までどこに行つてたの？」

「すみません、お母様。こちらの方の様子を見ておりまして…」

カテイアの言葉にフィルナは時雨を見た。

「ふう…まあ、いいでしょ。早く着替えてらっしゃい

「はい」

カテイアは時雨に軽く頭を下げると部屋を出た。

「時雨君…」

途端に鷹紀達は時雨の所へと駆け寄った。

「大丈夫なの！？あんた」

「寝ていなくて平気ですか？」

「…ああ、大丈夫だ」

それでも、疲れているのか時雨の声には力が無かった。

「そここの者達…！王の前で無礼であろう…！」

そんな時雨達を見た、一人の男が叫んだ。

その男の格好は他の兵とは違ひ銀色の鉄のような鎧では無く、黒

と赤を主とした異なったデザインの鎧を来ていた。

「ローレグよ、良いではないか

「しかし…」

「わしが良いと言つておるんじや。良い

「…分かりました」

ローレグは一礼し、先程までいたヴァロンの一歩後ろの場所に戻

つた。

「ヴァーロン王、そちらの方は？」

「おお、そうじやな。」この者はローレグ・マシュラ、わしらディー
ネ家の騎士じや

鷹紀の質問に、ヴァーロンは答えた。

「さて、話を戻そつかのよ」

「そうですね。それで…条件とは一体?」

「うむ、それはじやな。わしに君の話だといつ世界の話をしても
しいんじや」

「…は?」

「それ…だけ?」

予想外の内容に鷹紀に続いて葵も間抜けな返答をした。

「うむ、最近は祭事も無くての、暇なのじや」

「私からもお願ひするわ。この人たら、いつも暇だ、暇だつて言っ
てるの」

「……分かりました。そんな事でよければ、喜んで引き受けさせて
もらいます」 鷹紀はそう言い、頭を下げた。

「よし、決まりじや。話は明日からでよい。まずは部屋に案内させ
ようか、おい」

ヴァーロンは近くの兵を手招きして呼ぶと、鷹紀達を案内せらるよ
う言つた。

だが、そこを鷹紀は断つた。

「あの、出来れば城内を見てからにしたいのですぐ…」

鷹紀の提案に、ヴァーロンは快く頷いた。

「いいじやろ、では…」

「では、私が案内します」 するとそこへ、着替えを終えたカティ
アが現れた。

「…！」

「…うそつ」

「…綺麗」

その姿に時雨を除く三人は驚きを隠せなかつた。

三人が驚いた理由：それは、カティアの美しさだった。

その美しさは、この世のものとは思えない程の美しさで、言葉にするのも難しい程だつた。

「私がこの方々を案内します」

「うむ、まあ良いが…」

「王！…良いのですか、カティア様を」一緒にさせて「

そこへ、ローレグが割つて入つて來た。

「ローレグ、私はこの方々を信用に値すると思つております」

「カティア様」

カティアの言葉にローレグは少し驚いた様子だつた。

「ローレグよ、わしもこの者達を信用できると思つておる。大丈夫

じゃ」

「…はい、失礼いたしました」

ローレグは申し訳なさそうに言つた。

「では、客人達よ。また、夕食時に会おうか」

「はい、ではまた」

鷹紀達は礼をすると、カティアと共に部屋を出た。

第七話・友と闇

廊下に時雨達の足音が響く。

「あ、あの」

不意に葵がカティアに話しかけた。

「何でしょ？」

「な、何でお姫様があたし達の案内役を？何か理由があるんですか？」

「理由…ですか？そうですね」

カティアは少し考えると、にこやかに笑いながら答えた。

「あなた方といろいろと話してみたかったからでは駄目ですか？」

「そんな、理由で？」

予想外の答えに拍子抜けした葵だったが、カティアは笑っていた。
「私…こういう身分ですから、同じ年や歳の近い友人が余りいない
んです。ですから、あなた方とそういう関係になれたらと…」

暗い表情で話すカティアに葵は近づき手を差し出した。

「羽原葵よ。葵でいいわ」

「え？」

「ほら、握手」

「あ、はい！カステイニア・リル・ディーネです。カティアと呼ん
で下さい」

「よろしくね、カティア」

「はい、葵さん」

にこやかに笑う一人。

そんな二人を見ていた、鷹紀と華音もまた、カティアに近づいた。

「玖瀬鷹紀です。よろしく、カティアさん」

「あの、深嶋華音です。よ、よろしくお願いします、カティア…ち
ゃん」

「はい、よろしくお願ひします」

互いに自己紹介をし、笑顔を見せる四人。

たが、そんな中でもただ一人、時雨だけはその輪に入らず端からその様子を見ていた。

「のぉ、フィルナ」

「あら、何ですか？」

自室に戻ったヴァーロンはため息混じりにフィルナに問いかけた。

「わしの判断は、間違っていたと思うか？」

「…それは、あの子達の事？カティアの事？」

「…両方じゃ。仮に王とはいえ、わしの独断とも言える判断で今回

の事を決めてしまった。じゃから…」

「でも、あの子達を信じたんでしょう？」

「…うむ。あの時、わしはあの子らの眼を見た。その眼がどうにも嘘をついている様に思えなくてのぉ」

ヴァーロンのその言葉にフィルナも笑みをこぼし、頷いた。

「なら、それでいいじゃない。私もあの子達が嘘をついていないと思つたから何も言わなかつたのよ。貴方と私、そしてカティアも信じたのだから大丈夫ですよ」

「そうじやな」

フィルナの言葉に安心したヴァーロンだが、また心配そうな表情をしだした。

「だだ一人を除いて…だが」

口調は変わり、表情も真剣なものに変わった。

「最後に現れたあの少年…。あの少年の眼からは何も見られなかつた」

「やはり貴方も？」

「うむ、ただ一つ感じたのは…闇。何もかも覆い尽くす心の闇だけだつた」

「…闇ですか」

「…この先、何事も無ければいいのだが」

「では、まずはどこに行きましょうか」

「そうだなあ……訓練場みたいなど……」

明るい表情で話すカテイアに葵が答えた。

「訓練場……ですか？」

「あははは、駄目？」

「いえ、いいんです！ただ、意外な答えが来たので……」

カテイアの言葉に葵は苦笑した。

「皆さんも、そこでいいですか？」

「ええ、僕は大丈夫です」

「わ、私もです」

鷹紀と華音の返事を聞いたカテイアは時雨の方を向いた。

「時雨さんは？」

「…好きにしる」

時雨はたいして興味もなさそうに言い放った。

「分かりました。では、皆さん私について来て下さること」

カテイアはそう言い歩きだした。

一本の長い廊下をカテイアと葵は隣同士で歩いていた。

「でも、何故訓練場なんですか？他にも、いろんな場所がありますよ」「いやあ、それは……」

葵は人差し指で頬をポリポリと描きながら恥ずかしそうにした。

「家つて薙刀とか柔道してるからね」

「何ですかそれ？」

「あ、そつか。えっと薙刀って言つのは……」

葵は身振り手振りでカテイアに説明した。

「楽しそうだね、葵君」

「そ、そうですね」

「ん？どうかしたかい？何だかいつも以上に落ち着かない様子だけ

ど

「い、いえ、そんな事は…」

華音はもじもじと喋り、最後の方の言葉はほとんど消えていた。

「……」

その遙か後方で時雨は一人考え事をしていた。
(あの声を聞いて、意識を失い、気がついたらこの世界にいた。そして、倒れ、あの夢を見た…。やはり、どう考へても…あの声が原因のは確かだ。どうにかして、会話のようなものが出来ればいいんだが…)

「時雨君…早くしないと、置いて行くよ…」

「…ああ、今行く」

時雨は小走りで鷹紀達の後を追つた。

「ijiが第三訓練場です」

「第三つて、他にもあるの？」

「ええ、ijiを含め、この城には訓練場が五つあります」

訓練場内の階段を上りながら、カティアは葵の質問に答えていた。「でも、そんなに使うものですか？」

「二人の後ろにいた鷹紀は不思議そうに聞いた。

「ええ、私達の城には一～十までの隊があります。二つの隊で一つの訓練場を使う為、最低でも五つは必要なんです」

「そ、そういうば、私達を捕まえようとしたラルラって人も隊長つて呼ばれてました」

「ラルラですか？ラルラは三番隊の隊長ですよ。ijiの隊は番号が少ない程、強いと言う事になっています」

ラルラの話を三人は真剣に聞いた。

「それに、各隊の隊長になるには条件が必要なんです」「条件つて？」

「プシュケです」

「確かに、ラルラって人が使っていたな」

「え！？ラルラが…！」

カティアの表情が驚き変わった。

「カティア知ってるの？」

「はい、幼馴染みなんです」

「ところで、カティアさん。 プシュケとは何なんですか？」

「そうですね、では先ずこの世界の歴史からお話ししましょう。 その方が良いので」

「昔、この世界は霸王と呼ばれる者に支配されていたんですね」
カティアは時雨達に語り始めた。

「名はカルマ。カルマは、その優れた剣術と戦略の才によつて数年でこの世界の霸王として君臨しました。王となつたカルマは独裁政治でこの世を支配し、人々を苦しめたと聞いています。そんな日々が数年続いたある日、四人の…後に賢者と呼ばれる人達が現れました。彼らは人には無い力、プシュケを持つていたんです。そして、その力とその人望で多くの人々を集め、ついに霸王カルマを倒したんです。霸王を倒した四人は、その後別々の道を行き、結婚し、子供を産みました。その子供にも力は受け継がれ、またその子供にも。その後、世界は何事も無く年月を重ね、プシュケも広まつて行き、今にいたります。これが、この世界の歴史です」

一通り話しあ終えたカティアは一息ついた。

「…と言つ事は、その四人の賢者がプシュケの始まりと言つ訳ですか？」

「はい、そうなります」

そこで、鷹紀は一つの疑問を抱いた。

「だとすると、プシュケを持つ者は全員、その賢者の末裔と言つ事になり、下手をすればその中の数組は兄弟と言つ事ですか？」

「…」

カティアは言葉を詰まらせた。

「カティアさん？」

「…実の所、私達もプシュケの全てが分かつてゐる訳ではありません。なぜなら、賢者の末裔でない者がプシュケを持つてゐたり、末裔の者が持つていなかつたりするからです」

「え？ ジゃあ、プシュケって本当の所、何なの？」

「分かりません…。プシュケは無数に存在するんです」

カティアは席に座り、時雨達も又座つた。

「その辺りにプシュケと呼ばれる結えんがあるんですか？」

「はい、プシュケとは人の心、魂を意味します。そして、今まで発見された力も全て異なるものでした。その為、もしかしたら人の心や気持ち、魂と言った根本から違つたものに存在する力なのかという仮説が起てられました」

「だから、プシュケなのか…。でも何故、賢者の末裔でもない人々がプシュケに目覚めたんです？」

カティアへ鷹紀が問いかけた。

「そこはまだ分かつていません。ある者は戦いの中、またある者は日常の中で目覚めたと聞いています。その発生条件も何故その者がするのかも詳しくは分かつていながら現状です。…すみません」頭を下げるカティアに一同は慌てた。

「や、止めて下さい！カティアさん」

「そうよ、一国の姫があたし達みたいな奴らに頭を下げるだなんて！」

「いえ、しかし…」

「だ、大丈夫ですよ。カティアちゃんの話は凄くためになりましたから」

「そうですか。それなら、良いのですが」

そう言ってカティアは頭を上げた。

「では、次はどこに…」

「おーい！カティアー！」 カティアが次の場所を聞こうとした時、下の方から誰かの声がした。

「ラルラ！これから訓練？」

「ああ！今日、屈辱的な事があつたからな！その為の訓練なん…」

そこで、ラルラの言葉は止まり、ある一点を見た。

「ラルラ？どうし…」

「弥蒼時雨！…」

突如、ラルラが叫んだ。

「……ん？」

すると、先程まで暇そつに窓の外を眺めていた時雨が振り向いた。

「……何か用か？」

「何かじゃない！アタシともう一度勝負しろ……」

「断る」

「即答するなーーー！」

怒るラルラにカティアが声をかけた。

「ちょっとラルラ、何を言つているのー隊長のあなたが勝負をしきだなんて、もし怪我でもしたら……」

「しねえよ、コイツは……なんせ、アタシの攻撃が一度も当たらなかつたんだから」

「え！？じゃあ、ラルラがプシュケを使つた相手って」

「彼ですよ。カティア様」 驚くカティアに、どこからか現れたクラルトが話した。

「あなたは？」

「はい。私は第三番隊副隊長、クラルト・ジランと申し上げます」

クラルトは右膝を床に着き、頭を下げた。

「ジラン副隊長。何故、そう思つのですか？私にはそつは思えません

ん

「確かに、そう思われるのは当然の事です。しかし、一度見て頂ければ分かるかと……」

「……時雨さん、戦つて頂けますか？」

クラルトの言葉に何かを感じたのか、カティアは時雨に聞いた。

「……何故だ？」

「少し、見てみたいと思つたからです」

「……」

その時、時雨はベットから落ちそつになつた時、カティアに助けられた事を思い出した。

「確かに、あんたに貸しが一つあつたな……」

そう言つと時雨は、階段を下りラルラの所へと行つた。

「来たな」

「疲れるから、すぐに終わらしてくれ」

身構えるラルリとは対象的に時雨はやる気の無い返答をした。

「玖潟先輩…」

「と、止めなくていいんですか…」

「…」

鷹紀は、一人の心配そうな声に…何も答えられなかつた。彼も見てみたかったのだろう、時雨の…強さを。

だが、この時は誰も知らなかつた…この戦いが、時雨を…。

そして、他の三人をも巻き込んでしまう事態へと発展してゆくな

どと…。

世界は徐々に…逃れられぬ渦に取り込まれて逝く…。

第九話・敗退

勝負は一瞬だつた。

クラルトの投げた小石が地に着いた瞬間、ラルラは駆け出し、時雨を倒すと首を掴んだ。

「え？」

「…呆気ない…よね」

「は、はい」

あまりの事に鷹紀達は呆然とした。

しかし、カティアとクラルトに至っては余り動じておらず静かに見ていた。

「…退け」

掴まれていた腕を退かすと、時雨はそつと離れた。

「…」

無言で退くラルラ。

「…これまで終わりだな」

「…おい」

起き上がる時雨に声をかけるラルラだが、時雨は無視した。

「…おい！」

先程寄りも強めに言つたが、それでも時雨は反応しなかつた。

「おい！…待て！…」

涙れを切らした、ラルラが時雨の肩を掴んだ。

「…」

「お前、何故黙つてやられた！…」

「…」

「答える…！」

「俺は戦うとは言つたが本気でやるとは言つてもこないし、ましてやれとも言われていない」

「…つ……貴様！」

ラルラの拳が時雨の頬を狙うが、時雨はそれを避けた。

「…悔しいなら、俺を本気にさせてみるんだな」

「このつ……」

繰り出される拳を時雨は簡単に避けた。

「…遅い」

「まだだあ……」

ラルラの左アッパーが時雨の頬を掠る。

「…つ」

「はああ……」

体を右に捻り、出された右の拳は腹部に直撃し、時雨は吹き飛んだ。

「何よ、あの力！」

「カティアさん！まさか、あの人は」

鷹紀の言葉にカティアは頷く。

「はい、プシュケを持つています」

「え！？そ、それじゃあ時雨さんが……」

三人に不安が過ぎる。

「立てよ。殴つた瞬間に両手で防ぎながら後ろに飛んだんだ、それ程ダメージは無いはずだ」

時雨を見据えたラルラの声が訓練所に響く。

「…つ」

埃を払いながら立ち上がった時雨はラルラを問いただした。

「お前、今プシュケを使ったのか？拳のスピードが最初とはケタ違いいに速くなっている」

「は？使つてねえよ。アタシは狼の亞人だからな……！」

「…ちつ

勢いよく出される拳を

「…ちつ

避ける時雨だが、その表情には余裕が無くなっていた。

「…亜人？つて何？」

聞き慣れない言葉に葵は首を傾げた。

「亜人はこの世界に住む種族の一つです。この世界には大きく分けて四つの種族がいます。私達人間、ラルラのような人型に獣や鳥等の部分的な特徴がある亜人、亜人とは真逆に獣の中に人間の要素が含まれ、もつとも数も種類も多い獣人、そして巨人族です」

「ちょっと待つて下さい！じゃあ、今時雨君は狼と戦っていると言う事になるんですか！？」

鷹紀は焦った様子で言った。

「まあ、でも部分的な所だけですし、基は人間なので…」

「でも！あの人はブシュケも持っているんでしょ！危険よ！」

クラルトの声を遮り葵は叫んだ。

「そこお…」

「…ぐつ」

ラルラの鋭く伸びた爪が時雨の腕を掠めた。

今、ラルラの姿は先程とは違っていた。

緑色だつた髪は銀髪に、頭には一つの耳、尻尾が生え、歯は牙の様になり、手足の爪は鋭く伸びていた。

「…なるほどな、亜人ってのはそういう奴の事を言つのか」

「まあ、当たりってところだな。詳しくは、後で誰かに教えてもらつとけ！」

今までの倍の速さでラルラは時雨に襲い掛かった。

「ちい！」

眼で追いかける時雨。

だが…。

「はあ…」

「…！」

床に飛び散る血、それは時雨の胸から出た血だった。

「時雨！…」

途端に、葵達が叫ぶ。

「力、カティアちゃん！！」

「…今は、耐えて下わー」

「で、でも…」

三人の不安を余所にラルラは時雨に迫った。

振り下ろされる爪を避ける時雨だが、次第にその差は無くなつていった。

時雨は普通より優れたその導体視力でラルラの動きを、見る、事は出来た。

そう、見る事だけは…。（…右…）

ラルラの動きに反応し、すぐさま振り向いた瞬間、時雨は数メートルはあつた壁に叩きつけられた。

「がはっ！」

その場に倒れ、胸を押さえる時雨の口から血が吐き出た。

「が、ごほっ！…ごほっ！」

「でかい口叩いた割には、呆氣ねえなあ」

ラルラは時雨の胸倉を掴み上げた。

「てめえはただ、難癖つけて逃げるだけの卑怯者なんだよー！」

「…っ…！…ラルラ！」

時雨に腕が振り下ろされた瞬間、カティアが叫んだ。

だが…ラルラの耳にその声は届かず時雨の右肩に爪が突き刺さった。

肩から流れる血は時雨の腕をつたり、床に落ちた。 高速のスピードで刺さった爪は根本まで刺さり、貫通するはずだった。

だが、爪は先端部分しか刺さらなく、出血の量も少なかった。

「…てめえ」

「ぐつ、…つ」

ラルラは驚きの表情で時雨を見た。

本来、ラルラの狼の亜人としての能力は高かつた。 獣人には多少劣るもの、その速さは亜人の中ではトップレベルで、捕りえられる者など滅多にいなかつた。

それを、時雨は捕らえたのだ。

ラルラの…右腕を…。

「ちい！」

ラルラは掴まれた腕を振り払い、時雨との距離をとつた。

「はあはあ…はあ…」

「時雨君！」

「時雨…！」

するとそこへ、鷹紀達が駆け付けた。

「あんた、大丈夫！」

「あ、ああ」

「ほり、手を…」

「…すまん」

ふらつく時に鷹紀は肩を貸した。

「すみません、時雨さん。まさか、こんな事になるなんて…」

「…別に」

悪びれるカティアに時雨は気にもしない様子で言つた。

「でも…」

「…俺は、あんたに貸しがあったからやつただけだ

「しかし…」

「どつこじひる、やる、やらないを決めたのは俺だ。だから、気にしなくていい

「…分かりました。でも、せめて医務室まで」案内させてもらひませんか？」

「…分かつた。頼む」

そう言うと、時雨とカティアは訓練所を出て行つた。

「隊長！」

「お、おう」

クラルトの突然の呼び声にラルラはビクリとした。

「あなたって人は！何度も同じ事を言わせるんですか！」

「いや、だつてよ…。あいつが、本気にさせてみるなんて言うから

…つい…」

「はあ…もうちょっと、自覚して下さいよ。あなたは…」

「分かつた！分かつた！だから、説教は勘弁っ！」

「あ、隊長」

ラルラはクラルトの制止も聞かず訓練所を走つて出て行つた。

「あの、クラルトさん？でしたよね」

「え？ああ、はい」

不意に鷹紀がクラルトに話しかけた。

「何故、今回のような事を？何かの意図があつたんですね」

「ええ、まあ」

「教えて下さい」

「…」

クラルトは言葉を詰まらせた。

「あ、あの、どうして言つてもらえないんですか？」

「あたし達の友達があんな目にあつたのよ！」

「明日に…明日になればわかります。今回の事がどんな意味があつたのか…」 摺り出しかのように、クラルトは言つた。

「…分かりました」

「先輩！？」

「い、いいんですか！？」 驚く一人を余所に、クラルトは一言礼

を言い訓練所を出た。

「明日になれば分かるんだ、いいわ」

医務室で手当を受けた時雨は立えられた部屋にいた。

（あの時…）

時雨の脳裏にラルラに刺された時の瞬間が蘇る。

（俺の右手は、俺の意志とは関係無しに動いた…。あれは一体…）

時雨は右手を見ながら考え込んだ。

そして世界は、周り始め… 加速する。

急激に… 破滅の道を…。

登場人物・その二

名前 ヴァロン・カル・ディーネ
性別 男
年齢 39
種族 人間

ファヌエル城の王で、ラルラの父。

普段はじじ臭い喋り方をするが、真剣な表情になると口調が変わる。

祭ごとや時雨達の世界の話などが大好きで、遊び心が絶えない人物でもある。時雨達を信用しており、良き理解者。

名前 フィルナ・ロル・ディーネ

性別 女
年齢 38
種族 人間

ファヌエル城の妃であり、カティアの母、ヴァロンの妻である。

芯が強く、いつも物静かで落ち着いた女性。
人を見る眼は確かに、時雨達の良き理解者。
だが、娘のカティアや民達が危機に陥ると、どんな行動をすることも…。

名前 カステイア・リル・ディーネ
性別 女
年齢 18
種族 人間

ファヌエル城の姫で容姿端麗。

ラルラとは幼なじみでとても仲が良い。

能力者ではないものの、芯強く毅然とした態度をとっている為、民からはかなり信頼を受けている。

その反面、ラルラ達との会話等では素に戻る事も…。

能力者でない自分に劣等感を抱いている。

名前 ラルラ・クスートル 性別 女
年齢 17
種族 亜人

ファヌエル城の第三戦士隊、隊長で能力者。

カティアとは幼なじみで、今でも夜にこつそりと会つて話す程。何事にもおおざっぱで、結構がさつな所があるが、部下達には信頼されている。

狼の亜人の為、変化すると髪の色が変わったり、尻尾等が生えてくる。

名前 クラルト・ジラン

性別 男
年齢 18
種族 獣人

ファヌエル城の三番隊、副隊長。

超がつく程の真面目な男、その為、おおざっぱなラルラとは作戦上での意見で対立する事が多い。

だが、戦闘になると一変し、攻撃的な性格になる。それは、彼がリザードマンの獣人の為であるが、本人はそれを嫌っている。

登場人物・種族・種類

種族

亞人 アジン：見た目は人間に近いが、知能や力などは人間を越えている。最大の特徴としては体の部分的な所に獣や鳥等の一部分がある。

獸人 ジュウジン：亞人とは違い、どちらかと言つとこちらは獸に近い姿の種族。

力ティア達の世界の中でも一番種類数が多く、数も多い。
種類：リザードマン、オーク、半漁人、ドラゴニーコートなど、さまざま

巨人 キヨジン：一部の地域にしかおらず、希少数しかいない。知能は低いが、巨体と怪力で人を襲う。

【獸人の種類】

獸人の種類

リザードマン

蜥蜴人とも言う。

普段は人間に近い姿をしているものの、怒り狂うと本来の姿を見せる。

本来の姿は全身が鱗に覆われ、手足や歯が鋭くなる。
人間とは違い、左利きが多く、心臓も右側が多い。

オーク

人間とは全く違う姿をしており、気性が荒い。

大きさは人より大きく、牙や豚の様な鼻、剛毛が生えている。

エルフ

人間にもつとも近い姿をしているが、耳が長かつたり、瞳が蒼いなどの違いがある。

力は無いが、知能はかなり高い。

ケンタウロス

半人半獣の獣人の名前。数種類いると謂われるケンタウロス族の総称。

森の奥深くにいると言われている

半魚人

人間に近い姿をしており、争いを好まない種族。

地上には滅多に出る事は無く、一生を水中で過ごす。

地上では余り目立たないが、水中に入るとエラや水掻きが現れる。

ドラゴニコート

龍人とも呼ばれている

プライドが高く、気高い存在。

普段は人里には現れず、山奥に住んでいる。

普段は人の姿だが、竜の姿になると翼や角、龍鱗等が現れる。瞳

が蒼いなどの違いがある。

力は無いが、知能はかなり高い。

ケンタウロス

半人半獣の獣人の名前。数種類いると言われるケンタウロス族の総称。

森の奥深くにいると言われている

半魚人

人間に近い姿をしており、争いを好まない種族。

地上には滅多に出る事は無く、一生を水中で過ごす。

地上では余り目立たないが、水中に入るとエラや水掻きが現れる。

ドラゴニコート

龍人とも呼ばれている

プライドが高く、気高い存在。

普段は人里には現れず、山奥に住んでいる。

普段は人の姿だが、竜の姿になると翼や角、龍鱗等が現れる。希少しかしれない。

知能は低いが、巨体と怪力で人を襲う。

【獣人の種類】

リザードマン

蜥蜴人とも言つ。

普段は人間に近い姿をしているものの、怒り狂うと本来の姿を見せる。

本来の姿は全身が鱗に覆われ、手足や歯が鋭くなる。

人間とは違い、左利きが多く、心臓も右側が多い。

オーケ

人間とは全く違う姿をしており、気性が荒い。

大きさは人より大きく、牙や豚の様な鼻、剛毛が生えている。

半魚人

人間に近い姿をしており、争いを好まない種族。

地上には滅多に出る事は無く、一生を水中で過ごす。

地上では余り目立たないが、水中に入るとエラや水掻きが現れる。

ドラゴニコート

龍人とも呼ばれている

プライドが高く、気高い存在。

普段は人里には現れず、山奥に住んでいる。

普段は人の姿だが、竜の姿になると翼や角、龍鱗等が現れる。

第十話・笑顔（前書き）

遅くなつてすみませんm(—)

第十話・笑顔

陽が昇つた朝方、華音の部屋を誰かがノックした。

「は～い」

城の方で支給された寝巻を着たまま華音はドアを開けた。

「おはよっ！」

「あ、おはよ、葵ちゃん」そこに立っていたのは、制服に着替えた葵だった。

「どうしたの？」

「いや、朝早く眼が覚めちゃっても、迷惑かな？」

「ううん、大丈夫だよ。入って」

「ん、ありがと」

葵は部屋に入ると、華音と向かい合つよう椅子に座った。

「でも、どうしたの？ いきなり」

沸かしてあつたお湯をポットに入れ、華音は紅茶を一つテーブルの上に置いた。

「…夢…見たんだ」

「夢？」

「うん、昨日の事が全部嘘で、本当は学校にいたつていう都合のいい夢…」

葵は紅茶を一口飲み、気持ちを落ち着かせた。

「でもわ、やっぱり眼が覚めたら違つてや……あたし、泣きそうになつちゃつた」

「葵ちゃん…」

黙り込む葵に華音は声をかけた。

「…私もだよ」

「え？」

「私も、朝起きて全部が嘘だつたらて思つたし、やっぱり嘘なんかじゃないって分かつたら…不安になつた。もう、帰れないんじゃな

いかつて…でも、葵ちゃんが来てくれて嬉しかった…。だから、ありがとう」

「…うん、あたしも…ありがとう」

その後、少しの沈黙があつたが一人にとつては心地の良い沈黙だつた。

「でもさ、華音って、温度差激しいよね」

「え？ 何が？」

「だつて、あたしとかと一緒にだと普通なのに、大好きな玖潟先輩の前だといつとも…」

「わー！ 待つて待つて！！」

真っ赤な顔になりながら華音は叫んだ。

「い、いつから気付いてたの？」

「こつちの世界に来るほんの少し前かな」「くすくすと笑いながら葵は答えた。

「う～、内緒だよ」

「ははは、分かってるよ」 一人は紅茶を飲みながらまた、会話をし始めた。

食堂の大きなテーブルに数種類のパンとスープ、サラダが並べられた。

「…凄い量だね」

「そ、そうですね」

かなりの量に驚く鷹紀と華音。

今、テーブルには時雨達四人にヴァロン達三人が座っていた。

「ふむ、ではいただこうかのぉ」

「そうですね、あなた」

「では、全ての食材に感謝をし… いただこう」

ヴァロンのその言葉が合図となり全員が食べ始めた。

「ところで、鷹紀殿」

「はい？なんでしょう、ヴァロン王」

「いつ頃、ぬしらの世界の話をしてくれるのかのぉ」

「そうですね、王の都合がよければいつでもいいですが」

食べかけのパンを皿に置き、鷹紀は答えた。

「そうか、ならば食事の後に昨日と同じ場所に四人で来ててくれるかのぉ」

「あ、はい。分かりました」

「うむ、宜しく頼む。ところで、話は変わるが時雨と言つたかのぉ、

君は？」

ヴァロンは時雨の方を向いた。

「…ああ」

『…』

時雨の返事に部屋の周りにいた兵達やメイド達は驚いた。

「し、時雨！あんた…！」　途端に向かいの席にいた葵も身を乗り出した。

「…なんだ？」

「な、なんだってあんた！王様よ！王様！」

「だから何だ。王だろうが何だろうが、一人の人間には変わりはないだろうが」

「そ、それはそうだけど」　言葉に詰まる葵。

「ホツホツホツ！よいよい」

そんな葵や兵達を尻目にヴァロンは笑い出した。

「確かに、時雨の言う通り、わしも一人の人間には変わりはない」

「そ、そうですか」

呆気にとられた葵は椅子に座った。

「で、何の用なんだ」

「いや、昨日、倒れたと聞いていたからの。気分の方はどうかと思つたんじや」

「…大丈夫だ」

「そうか、なら良い」

ヴァロンはニシ「リと笑うとパンを食べだした。

「ねえ、あたし町に行つてみたい！」

朝食を食べた後、時雨の部屋のドアを開けた葵がいきなり言った。
「は？」

本を読んでいた時雨は間の抜けた声で答えた。

「だから、町に行きたいって言つてんの！」

「…何故俺なんだ？他にも…」

「玖潟先輩はヴァロン王と、華音は城内をもつと見たいって。で、残つてるのはあんただけ」

「…断る」

「拒否権は無しよ」

「おい、俺の人権は？」

「無し！ほら、行くわよ！」

「ちよつ！？おいつ！」

葵は時雨の腕を掴むと町へと駆け出した。

ガヤガヤと騒がしい町並みに葵と時雨はいた。

「はあ～、凄いわねえ」

「…はあ」

眼を輝かせる葵、それとは対照的に落胆の時雨。

「もう、いつまでため息ついてるのよー」

「…誰のせいだ」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「…気にしないって、お前が…」

「あ、何あれ！？」

「おい」

何かを見つけた葵は駆け出した。

「わあ！美味しそう！」

葵の田の前にはいくつもの饅頭が置かれていた。

「おじさん！これいくら？」「

「ん？一個40イフンだよ」

「じゃあ…五つ頂戴」

「あいよ。じゃあ、200イフンだ」

「ん、分かった」

ポケットをざわざわと漁る葵だったが、お金が無い事に気がついた。

(そ�だ、あたしの世界のお金無いんだった。
焦る葵に店の店主は不思議な顔をした。

「どしたい？嬢ちゃん」

「いや、えと…」

戸惑う葵。

その横を時雨が通つた。

「これと交換でどうだ？」時雨が差し出したのは、一本のボールペンだった。

「何だいこいつ？」

「ここを押すと、字が書ける代物だ」

さりとて紙に字を書く時雨。

「ほり、こりゃ凄い。いいだろ、成立だ」

「悪いな」

そう言いボールペンを渡すと、饅頭の入った袋と葵の腕を掴み、時雨は立ち去つた。

「……」

「…ありがと」

無言で渡された袋を掴み、葵は笑つた。

「…今度は金を持ってからにしろ」

「うん、じめん」

「…何で五つなんだ？」

「ん？えっとね、あたしと華音、カティア、玖渕先輩と時雨

「…なら、奢ったかいがあつたのかもな」

「やつ~なり、今度は皿で」
「…好きにしろ」

「~解~」

時雨の言葉に葵は笑顔で答えると、手を出した
「帰りつか」

「…あ~」

時雨は葵の手を握ると城へと歩きだした。

第十一話・違い（前書き）

えへ、前置きがかなり長い小説なのですが（すいません、本当に…）次の話から戦闘やアクションが出てきます。今後ともよろしくお願いします。

第十一話・違い

時雨達が異世界にきて一週間程たつたある日、事件は起きた。その日は朝から城中が慌ただしく、空氣も張り詰めていた。

「何の騒ぎだらう?」

「うん、そうだね。何か皆慌ただしいよね」

葵の言葉に反応する華音。

朝食を終えた、時雨達は廊下を歩いていた。すると、一人の兵士が走って来たのだ。

「あのー、ヴァロン王からの伝言を預かって参りました。今すぐ元へ、謁見の間に来てほしいとの事です!」

「ヴァロン王ですか?」

「はい!皆さんにお伝えしたい事があると」

「…分かりました。すぐに向きます」

少し考えた後、鷹紀は言った。

(多分、この騒ぎと関係があるんだろう。…嫌な予感がする)

謁見の間に着いた四人はすぐにヴァロンに話しかけた。

「ヴァロン王、僕達を呼んだ理由はなんですか?」

「…ふむ…だいたいの察しあつてよつじやの。鷹紀よ」

「…ええ、まあ」

「そうか、なかなか良い勘をしどる」

ヴァロンは顎の鬚を摩りながら笑った。

「…もうすぐ、戦争が起つる。早ければ、明日にでもじや」

『…』

その言葉に時雨を除いた三人は驚いた。

「隣国のアーマスと言つ國の王とその息子が、カティアを嫁に欲しいと言つてきてのお。始めは断つたんじや。あの國の悪態の酷さは噂には聞いていたからのお。だが、何度もしつこく言つてきたんじ

や、娘をよこせと…。わしは断つた、貴様らのよつな連中にやる娘などいないと。」

「やうしたら、戦争を仕掛けに来たと？」

「…やうじや」

鷹紀の言葉に苦笑するヴァロンだった。

「それでじやが…」

ヴァロンが何かを言おうとしたその瞬間、謁見の間の扉が勢いよく開いた。

「報告します！…敵軍の軍勢がここから数十キロ先の方で確認しました！数にしておよそ百万だそうです…！」

「…そうか、分かった。また何か分かつたら報告を頼む」「はっ！」

兵士は敬礼をし、部屋を出た。

「話とは、この先の事じや。早ければ、明日にでも戦争が始まる。そうなれば主らの命の保証は無い…じゃから今のうちに遠くに逃げるんじや」

「…こえ…ですが…」

「もし、ここに残りたいと言つのならば構わん。ビリするかは主らで決めてくれ…話は以上じや」

ヴァロンは席を立つた。

「わしはこれから会議がある。すまんの…」
部屋に取り残された四人は呆然とした。

「どうすんのよ…一体何なのよ…！」

「あ、葵ちゃん、落ち着いて」

鷹紀の部屋に集まつた四人は早速話し合いをし始めた。

「まず、決めなきやいけないのは僕らがビリするかだ」

鷹紀の声が嫌に響く。

「あたしは…正直逃げたいけど…だけど…お世話をなつたのもあるし、何よりカティアの友達の助けになりたい

「わ、私も同じ意見です。何が出来るのか分かりませんけど、私達をこんなにも温かく迎えてくれた、この城の人達の為にも」

「うん、僕も一人と同じ意見だ」

三人は強く頷くと同時に時雨を見た。

「時雨、あなたも同じでしょ？」

「……」

「時雨君？」

「……バカらしい」

「は？ちょっと、あんた」 時雨の言葉に驚く三人。

「バカらしきって何よ！－あんた、ここの人達の為に何かしようとは思わないの！－！」

「あ、葵ちゃん」

「落ち着いて、葵君。…時雨君、君はこの城の、ヴァロン王達の為に何かをする気は無いのかい？」

少しの間があり、時雨は口を開いた。

「…無いな。確かに世話にはなったが、その為に命をかける理由はない」

「で、でも、命をかける必要は無くても、何かお手伝いは出来るんじゃないですか」

「そうよー命をかけなくてもいいから。何かしら、しようと今は思わないの！－！」

「…思わん。そもそも、こんな事に深入りする気など始めから無い。やりたければ、貴様らだけでやれ」

そう言って、時雨は部屋を出て行つた。

「何なのよあいつ！－！」

「仕方ないさ、やりたく無いって言つてはいる事を無理強いする訳にもいかないからね。僕らだけでもやろう」

「は、はい、頑張ります」

「分かりました」

華音は焦りながらも返事をし、葵もまた、渋々納得した。

次の日、葵達はそれぞれの場所へと行つた。

葵はラルラの所へ、鷹紀はクラルトと共に会議室へ、華音は医務室へと。

「ふうー」

葵は一息ついた後、ラルラの部屋のドアを開けた。

「お、来たな。王から話は聞いた、こっちだ」

「あ、はい」

ラルラに連れられるまま、葵は部屋を出た。

そして、ラルラの部屋から少し進んだ先のドアの前で止まつた。

「ここだ」

ドアを開けた先には無数の武器や鎧、盾などがあつた。

「じゃ、お前の装備を整えるか

「はい！ー」

「失礼します」

「失礼します」

クラルトの次に鷹紀がゆっくりと入つて來た。

そこには、ヴァロンを筆頭に各隊の隊長や副隊長が、数十人いた。

「おお、来たか。そこに座つとくれ」

「あ、はい」

ヴァロンに薦められるまま、鷹紀は椅子に座つた。

「でば、作戦会議を行おうなの。早くせねば、始まつてしまつ

医務室

「…あの」

医務室のドアをゆっくりと華音が開けた。

「ん？あんたか、王が寄越したつちゅうんは
「は、はい」

中にいたのは白い白衣を来た一人の女性だった。

「ウチはアズ、ベティル・アズや。よろしくな」

「あ、深嶋華音です。よろしくお願ひします」

「華音か、ええ、名前やな。ほな、こっちに来な、教えるわ
「はい！」

そして、その頃時雨は一人町に来ていた。

（…戦争が始まるせいか、町も前に来た時より空気が張り詰めている
な）

辺りを見回しながらそう考へてる時だつた。

『…を…求め…れに…』

「…つ…！」

突然の声と共に強烈な頭痛が時雨を襲つた。

『…呼べ…我…を、我は…り！』

「…がつ…！」

あまりに強烈な痛みに時雨はその場に倒れた。

第十一話・目覚め（前書き）

遅れて、大変申し訳ないです

第十一話・目覚め

「…はあはあ」

鳴り響く轟音と声、流れ、飛び散る血濁き。

そんな中に葵は一人佇んでいた。

「死ねえ！」

「…はつ！」

振り下ろされる剣を薙刀で左に受け流す葵。

「はあ！…」

そして、薙刀の中心を回転させながら柄の部分を相手の顔面に叩き込んだ。

「がはつ！」

「まだあ！」

倒れ込んだ相手の剣を足で踏み、柄の部分でおもいつきり顎を打ち抜いた。

「はあはあ

「この女があ！…」

「…つ！」

背後からの気配に気付き避けた葵だったが、腕からは微かに血が流れ出た。

「くつ、この…！」

武器を弾き飛ばそうと、薙刀の柄の部分を振り落とす葵だったが、敵はそれを軽々と避け、葵に切り掛かった。

「…！」

「もりつたあ！…」

「甘え！」

その瞬間、ラルラが敵の兵士を吹っ飛ばした。

「ぐ、このアマア！…」

兵士は剣を拾うとラルラに向かつて走つて來た。

「…はああ！」

すると、ラルラは右手に意識を集中させた。

「死ねえ！」

「テメエがあーーー！」

刹那、ラルラの右手が相手の腹部に入つた。

「ぐつーーー？」

その瞬間、空氣の渦が集まり、兵士を数十メートル先まで吹き飛ばした。

「…ラルラ」

「…帰れ」

「え？」

「殺す度胸もねえ奴が戦場にいても邪魔なだけだ」

「…っ」

核心を突かれのか、葵の表情が曇る。

「ここに来る前に言つたよな、殺す度胸がねえんなら来るな、死ぬだけだつてよ」

「で、でもーーー！」

「でも、じゃねえーーー今、テメエがそつだつたろ？」「…よく考えろ、ここで帰るか覚悟を決めるか」

そう言つて、ラルラは戦場の渦の中へと消えた。

「…覚悟」

呆然とする葵。

その時、先程吹き飛ばした兵士が葵に迫つた。

「そつちは、包帯巻いといでーーー！」

「は、はい！」

腕を切られた兵士に包帯を巻く華音。

「アズさん！次が来ましたーーー！」

「状態はーーー？」

「胸から腰にかけて切られます！」

「奥に運んで！ウチがやるわ！！」

「はい！」

「華音！アンタはここで、応急処置や！」

そう言つや否やアズは奥に入つて行つた。

「次入ります！」

「はい！」

その声に反応し、華音が振り向いた瞬間、絶句した。

入つて来た患者は両足は有り得ない方向に曲がつており、腕や体には無数の切り裂かれた後があつたからだ。

「アズさんは！」

「今、プシュケで治療中です！」

「…じゃあ、そこのあなた！」

「は、はい！」

「この人の応急処置をお願い！私達、他の人もしなきゃならないの！」

女性はそう言つと他の場所へと走つた。

「…だ、大丈夫ですか！」 ゆつくりと薬を塗り、包帯を巻いて
する華音だが…。

「ぐう…」

突然、患者が苦しみだした。

「大丈夫ですか！！」

「はあ…はあ…くない」

「え？何？」

華音は口元へと耳を近づけた。

「…死に…たくない、死に…たくない

「つ！大丈夫です！意識をしつかり保つて下さい！」 必死に励ましながら処置を施す華音だつだが、男の声は次第に小さくなつていつた。

「…妻と子…に…会…た…」

「駄目です！しつかり！アズさん！！アズさん！！」必死に叫ぶものの、奥からアズの来る気配は無かつた。

「……」

「駄目…駄目です。死んじゃ…駄目…です」涙声ながらに言つ華音だが、男は無言のまま眼を閉じた。

「いや、いや…」

『…「めんな、一緒にいられなくて』

「…っ…」、いやあああ…！」

瞬間、華音の両手が淡く光りだした。

「…死なせない。絶対に、死なせない！」

光は男を包むと、まるで生きているかの様につづめき始めた。

「…はあはあ」

全身、血だらけの葵。

その傍らには腹部を切られ、死んでいる兵士がいた。

「…あたし…あたし…人を…殺したの？この手で？殺した？あたしが？あたしが…いや、いやああ…！」あまりの衝撃に葵は氣を失つた。

「お父や～ん！」

「ん～？どうした？」

一人の男性が側にいる小さな女の子の方を向いた。

「あたしね、大きくなつたらお父さんみたいな警察官になりたい！」

「おお～そつか、葵は大きくなつたらお父さんみたいになりたいか

！」

「うん！」

無邪気な笑顔で笑う葵に男は顔をほころばせた。

「じゃあ、今からいろいろと勉強しないとな」

「えへ、お勉強嫌~い」

「はははは、好き嫌いは駄目だぞー葵」

男は屈託のない笑顔で笑うと幼い葵を軽々と持ち上げた。

（…お…父…ん…。…そうだ…あたしは…お父さんの為にも…あんな事があった…。…お父さんの為にも…）

「こん…な…所で倒れ…てる訳にはいかない…のよ…」

四肢に力を込めて葵は立ち上がった。

「お父さんの意志はあたしが…受け継ぐ為にも…」

瞬間、砂塵の中から一人の兵士が葵に切り掛けた。

「死ぬ訳にはつ…！」

刹那、葵の視界が一瞬途切れた。

そして、次に見た景色は先程いた兵士の真後ろだった。

「はあ…」

葵は何の躊躇いも無く兵士の首を切った。

「はあはあ、今のもしかして、プシュケ？」

葵は驚きの表情で自分を見つめた。

（あたしはさつき、背負う事を決めた…。人を殺す事の十字架を…。その覚悟がもしかしたら、あたしに力をくれたのかも…）

「だったら…あたしは…！」

葵は手に力を込めると、戦場の中へと走つて行つた。

邪魔だあ！！

ラルラが相手の兵士を吹き飛ばす。

死ねえ！

一
ウゼエ!
」

瞬間、後ろから迫る丘

（二）

モルヒネ

1

一瞬の隙を見せた三川六は兵士が数人迫る
せん！！

刹那、兵達の本が所うち、刃口から炎があがつた。

「カラレト」

「可、氣を抜いてあるんですか。稼^シ!!」

「レツ、土かせ！」

ラレラは獣人七

腕を切り裂いた。

また、クラルトも腕だけを獣人化させ、鎧ごと相手を斬つた。その瞬間、炎が燃え上がり兵士は焼死体と化した。

ପ୍ରକାଶକ

すると、一人の正

「チツ、二のつ！」

ラルラが突つ込もうとした瞬間、その兵士の首が切り落とされた。

二
誰だ？

ラルラがその背後を見た。

そこには、血まみれの薙刀を持った葵がいた。

「お前...」

ラルラ…あたしも決めた。戦う事を…背負う事を…」

「……」「……

何かを言おうとしたラルラだったが、葵の強い瞳を見た途端、何も言えなくなつた。

「——葵！」

その時、葵の背後で兵士が剣を振り下ろした。だが、その剣は空を斬り地に叩きつけられた。

「なっ！」

驚く兵士の背後で葵は薙刀を首もとに振り下ろした。

「おまつ！？ プシュケが使えるのか！？」

「うん、この世界の人間じゃないあたしに何で使えるかは分からないけど……。使えるのなら、あたしは使う。皆の為に……カティアの為に……」

「……そうか。ああ！ そうだな！」

ニカツと笑うラルラにクラルトが話しかけた。

「隊長！ 私は一度、マスウェルの所へ行きます！」

「ああ！ ここはアタシと葵で十分だ！」

ラルラのその声を聞くや否やクラルトは走り去った。

「ラルラ、マスウェルって誰？」

「アタシの隊の支隊長だ」

「支隊長？」

「ああ、後で教えてやるよ。それより、今はこっちだ！」

ラルラの見据える、その先には数十人の兵達が見えた。

その頃、医務室でも事は起こっていた。

「何や……これは」

アズは驚いていた。

「はつ……くう……」

そこには、手から何か光のようなものをしている華音とそれに包まれて居る患者がいたからだ。

「お願い…死なないで…お願い！」

「……うう」

その時、死んだはずの俺の指が動き始めた。
(もう、あんな思いはしたくないの…)

「だからっ！」

華音が手に力を込めるときが赤く輝き始めた。

「か、華音！」

突如、アズが叫んだ。

「！！」

いきなりの事に驚いた華音は光を消してしまった。

「ア、アズさん…なんで…なんで邪魔をするんですか…！」この人は

！」

「大丈夫や」

声を荒ぐする華音の頭をアズはそっと撫でた。

「え？」

「ほら、見てみ」

二人の視線の先。

そこには、寝息をたてて眠る俺の姿があった。

体中にあつた傷や骨折等も無く、綺麗になっていた。

「華音、あなたはまだプシュケをよう使いこなせん。治療型のプシ
ュケは珍しい上に扱いがむずいんや。これ以上この人にしたらどう
なるか分からん、だから止めたんや」

「…アズさん…私…」

「ええ、次からはやり過ぎないように気いつければいいんや

「…はい」

落ち込む華音をアズはそつとなだめた。

「さて、患者はまだまだあるで。いけるか？華音」

「はい！」

「ええ、返事や」

笑顔になるアズだったが、その心境は驚きだった。(プシュケは

またまだ謎の多いもんやから華音が使えるのも納得は出来る。それより気になるんは、その能力や。あれはただ、治す能力やない、何かもつと別の力のような気がするわ）

「葵！！」

「分かってる！」

しゃがむ葵の上をラルラが飛び、敵を切り裂く。

「こいつ！？」

「はっ！」

振り下ろされる剣を刃の部分で受け止めた葵は、一瞬にしてその場から消え、兵士の背後を切り付けた。

「ふう、数が多いわね」

「泣き言か？葵」

「そんな訳無いでしょ！」 剣をかわし、葵は顔面に柄を突いた。

「葵！？」

「何？」

「今のはうちに言つておぐぞ。アタシのブショケはな吹き飛ばす力だ」

「吹き飛ばす力？」

迫つてくる兵達を倒しながら、ラルラは話した。

「そう、アタシが右手を叩きつけた奴は大きさや重さに関係無く、吹き飛ぶってことさ！こんなふうになー！」

瞬間、ラルラは一人の兵士を数十メートル吹き飛ばした。

「ひ、怯むなあ！！」

兵達は叫ぶと二人に迫った。

「葵、そこで見とけ。これが隊長格の力だ」

ラルラはそう言つと、超スピードで敵に突っ込んだ。

「……」

葵は言葉を失った。

敵に突っ込んだラルラはその速さで敵を翻弄し、次々と敵を切り

裂き、蹴り飛ばし、吹き飛ばした。

数分後、周りの敵をあらかた倒したラルラは葵の所へと戻つて来た。

「…凄いわね」

驚きの表情で葵が言つ。

「ハハハ、一番隊、隊長のソルウェなんかはもつとだぜ。アタシなんかまだまだだ」

「そう?」

「ああ、奴はやべえぞ。アタシにも手におえねえ」

ラルラは苦笑しながら言つた。

「さてと、そろそろ城に戻るぞ」

「え? どうして?」

「敵の増援が来ない。それに、アタシも消耗しているからな。一旦、帰らないとマズイ」

「え、でも!」

「じゃあ、このまま戦つて、体力が尽きて、殺されるのか?」

「そ、それは…」

「焦るな葵。こいつに戦いは一日で終わるもんじゃない、今からそんなんだと後で倒れるぞ」

「…うん、分かった」

「ありがとな、じゃ、帰るか」

「あ、待つて」

城に向かつて歩きだそうとするラルラを葵は止めた。

「行くならあたしのプシュケで行こう」

「あ、そうだな。確かに葵のは瞬間移動だつたな」

「うん、多分掴まつていれば大丈夫だと思つんだ」

「ま、要は試しだな」

「そだね」

葵はラルラが掴まるのを確認すると一瞬で移動した。

だが、移動したのは葵だけでありラルラはその場に取り残されたままであった。

そのうえ、移動した葵も五十メートル程しか進んでいなかつた。

「あ、あれ？ ラルラ！ 「ごめん！ 無理みたい！」

「ああ！ そうみたいだな！ つーか、何でそんだけしか進んでねえんだ！？」

「分からぬー！ それに今、そっちに戻ろうとしたけど！ 何故か出来ないしー！」

「…分かつた！ 今、そっちに行くー！」

少し考えたラルラは走つて葵のもとに行くと口を開いた。

「ねえ、どうしよう。アタシプシュケ使えなくなつたのかな」

焦る葵にラルラは話した。

「ん？ ああ、大丈夫だ。ただ、単に条件付きのプシュケなんだと思うしな」

「条件付き？」

「ああ、『じじじ』なんだからな。城に帰つたら教えてやるよ

「…うん」

葵は少し不安げに返事をするとラルラと共に歩きだした。

第十四話・休息

その日の夜、戦場から戻つて来た葵はすぐさまシャワーを浴び、体中に付いた血を洗い流した。

「…ふう」

頭をタオルで拭き、葵は支給された下着と衣服を身につけた。

「よう！」

「あ、ラルラ」

すると、すぐ後ろには同じくシャワーを浴びたばかりのラルラが下着だけの姿で立っていた。

「状況つてどうなつてるの？」

「ん？ああ、あの後多少の小競り合いはあつたが、今は双方とも仕掛ける意思は無いってよ。ただ、いつまた始まるか分からん状況だから準備だけはしとけよ」

「分かつた」

さつさと服と軽い装備をしたラルラは脱衣所を出ようとした。

「…ラルラ」

だが、葵がそれを止めた。

「プシュケの事なんだけど」

「ああ、後で部屋に来いよ。教えてやる」

「うん、分かつた」

ラルラはそう答えると脱衣所を出た。

城の廊下を鷹紀が走っていた。

「はあ…はあ…」

パンツと扉を開けると、そこにはラルラと葵、華音がいた。

「玖潟先輩？」

葵が不思議そうに声をかけると、鷹紀は部屋に入つて入つて來た。

「ふ、一人が…プシュケに…はあはあ、目覚めたって聞いた…ら…じつと、していられなく…て…つい…」

「まあ、茶でも飲めよ」

息つく鷹紀にラルラは、お茶を出した。

「あ、ありがとう…ふう、落ち着いたよ」

一息ついた鷹紀はさつそく一人に今日の事を聞いた。

二人はそれぞれ話した。今日、起こった事、プシュケに目覚めた事を…。

「…うん」

全てを聞いた鷹紀は悩んでいた。

「何故、異世界の僕らがプシュケを?」

「さあな、アタシ達だつて全部を知ってるわけじゃない。王達もアタシ達も驚いてるんだからな」

「そうか…じゃあ、なんで一人はここに…」

「わ、私達ですか?」

「うん」

「あ、それは、ラルラがプシュケについて詳しく教えるって言ったからですよ」 鷹紀がラルラの方を見る。

「僕もかまわないかな?」

「ん?ああ、いいぜ」

ラルラはお茶を一気に飲むと話し始めた。

「まず、プシュケって言葉の意味が魂や心を意味するのはカティアから聞いたな?」

「うん。あと、プシュケは無数にあるって事も聞いたわラルラの問いに葵が答える。

「そうだ、プシュケは無数に存在する。数はそつたくないが、全て異なる能力だからだ。プシュケには大きく分けて三つある。戦闘用、治療用、その他だ」

ラルラは葵を指差した。

「葵、お前のはその他だ。華音、お前のは治療用とアズから聞いた。ちなみに、アタシのは戦闘用、クラルトなんか、もろに戦闘向けの能力だ」

「ラルラさんとクラルトさんの能力って？」

華音の質問にラルラが答えた。

「ん？ああ、アタシのは飛ばす能力だ。これは、相手に当たる力が強ければ強い程、それに比例して相手を吹き飛ばす飛距離や衝撃も強くなる力だ。クラルトのは炎の能力。こいつは結構厄介でな、剣で切りつけた場合のみ炎が燃え上がるんだ」

ラルラの言葉を聞いた葵が首を傾げた。

「もしかして、それがさつき言ってた条件の事？」

「そうだ。ほとんどのプシュケには条件が伴う、ないプシュケなんてのはほんの一握りだ。ちなみにアタシのは、右手で触れなければならないし、クラルトなんか剣じやなきやいけねえんだ」

「ふうん、じゃあ、あたしのは？」

「知らん

「へ？」

ラルラの予想外の返答に葵は間抜けな声を出した。

「それを知る為には使うしかねえんだ。使つて使つて使いまくつて初めて、その能力の長短がわかるんだ」

「そつか、数をこなすしかないのか」

「この戦いに勝つたら、訓練所でみっちり教えてやるよ」

「うん、お願いね」

「華音！お前もだぞ」

「あ、はい！」

ラルラに声をかけられた華音はビクリとした。

「ハハハ、そんなにびっくりするな。お前の場合は違う方法でやるから安心しろ」

「え？あ、そうなんだ…。よかつたあ…」

ラルラの言葉に安心した華音は大きく息をはいた。

「なあ、そういうやあ時雨はどうした？あいつには戦場で戦つてもうおつと思つてたんだがよ」

ラルラのその発言に三人は黙り込んだ。

「…彼は…いないよ」

「は？」

鷹紀の答えにラルラは間抜けな声をだした。

「だから、いないのよ！あいつ、バカラしことか言つてどうか行つたの…！」

「いな…って、城の中にもか！？」

「は、はい、私達も捜したんですけど…。城内にまだいるも

「ーっ…あの、バカッ…！今がどんな状況か分かつてんだろ？」「…！」

ラルラは怒りまかせに壁を殴つた。

(時雨…あんた、今どこのところのよ。早く帰つてきてよ)

その頃、ある建物の中で時雨は眠つていた。

「……………」

時雨の眼がゆっくりと開いた。

「……………」「はい」

松明で照らされた部屋を見回すとそこには二つとも簡易式のベッドが並んでいた。

(見たところ、建物を借りて作った救護室か何かだろ)
「起きました？」

時雨が考え方をしていと、奥から一人の女性が現れた。

「…誰だ」

「わたしはレイ・マタニス。町で飲食店を経営している者です」

「…何故、俺はこんなところ…？」

「…」

「…おい」

「…礼儀を知らないのですか？」

「…は？」

「普通、わたしが名乗ったなまらば、貴方も名乗るのが礼儀ですよ」

ミレイの有無を言わせぬ威圧感に時雨は渋々名前を言った。

「弥蒼…時雨さんですか。では、よろしくお願ひします」

「あ、ああ」

(ここのつとこると、どうも調子が狂つ……。さつぞと出て行くか)壁に掛けた制服の上着を取ると時雨はベットから下りた。

「世話をなつた」

そう言って出て行つとした時雨の首をミレイは掴んだ。

「逃がしませんよ」

「…な、何がだ？」

「治療代です」

「は？」

ミレイは無理矢理、時雨を椅子に座らせてみると田の前に紙をたたきつけた。

「薬代やベット代、人件費やらを入れて… 3,000イフンです」

「…ぼつたくりもいといといだ」

時雨はボソリと言つた。

「…何が」

「いや、何でもない。それより、俺は金が無い…だから、見逃…」

「なら、働きましょつ」

「…」

時雨は觀念した。

多分、悟つたのだらば、この女性は向を言つても自分の意見を曲げる事は無い事を…。

「明日の朝、また迎えにきます。今日はいかで休みになつて下

さい」

「…あ」

「では、また

ミレイは一礼すると部屋を出て行った。

「…疲れた」

ため息と共にそう言つて壁面は眠りについた。

第十五話・幻影

「時雨さん…次は三番のテーブルです…！」

「…分かった」

「…時雨さん？」

「分かった！」

ミレイの威圧に負けた時雨は大声でそう叫んだ。

時刻は朝方、時雨は町の避難所の一角にある店でウェイターとして働かせられていた。

治療代の代わりに…。

「兄ちゃん、こっちも頼むよ」

「…はい」

時雨は笑顔ひとつない表情で返事をし、ミレイの所へ行った。

「あそこのお客もだ」

「…」

「…あひらの…お客様もです」

「はい、分かりました」

(…地獄…だ)

表情には出さないが時雨は苦痛の時間を味わっていた。

「この資料も持つてけ…！」

「あ、はい！」

兵士に渡された資料を持つて鷹紀は書庫室へと急いだ。

戦う力や治療等が出来ない鷹紀は戦いの記録や作戦等をまとめの書記の手伝いをしていた。

「よつと…ふう」

棚の方へと資料はを置いた鷹紀は一息ついた。(皆が戦つて
いるのに僕はこんな事をしていいんだろうか…)

鷹紀は今の自分に疑問を感じた。

自分は本当に役にたっているのだろうか、こんな事がしたかつたのだろうか…。

そんな事を考へてゐる時だつた。

ふと、入口に誰かがいる気がした鷹紀は振り向いた。だが、そこには誰もおらず、ただ扉があるだけだった。

「…疲れてるのだろうか」 そう自分に言い聞かせ出て行こうとした時、通路の奥に誰かを見かけた。

「…いや、まさか…そんなはずは…」

鷹紀の表情が驚きに変わる。

「あいつが…あいつがいるはずは…」

途端に鷹紀は勢いよく走りだし、追い掛けた。

「はあはあ…」

城内を駆け巡り、鷹紀は城の外に出た。

(何であいつが…雅斗がいるんだ…)

「くつ…」

人影を見つけた鷹紀は又、走りだした。

そして、いつの間にか戦場近くまでやつてきたのだった。

「ま、雅斗！ 何で、何でお前がここに…！」

目の前にいる人物に、そう問い合わせる鷹紀。

だが、そこには誰もいなかつた。

いや、正しくは鷹紀以外には見えなかつたのだ…そこにいる人物が…。

「お前は…お前は死んだはずだろ…！」

その言葉に反応した影は振り向き笑つた。

「…つ…」

途端に鷹紀の顔が歪む。『お前はそれでいいのか？ 鷹紀』

「なつ…？」

驚く鷹紀。

だが、確かに影はの口はそう動いたのだ。

声は発せずとも。

『疑問を感じても。ただ、言いなりに動いて、考えて、呟くして、お前は満足か?』

「僕だつて、皆の力になりたいさー悔しいさーけど、無いんだよー!力が!能力が!—!プシュケが!—!」

叫ぶ鷹紀だつたが、それでも影は優しく笑った。

『俺は知ってる。お前の強さを心を想いを…』

「僕は…お前が思っている程強くない…。僕はお前を…」

『囚われるな…俺に。お前の凄さは俺が一番知っている。本当のお前はそんなんじゃない』

「僕は…」

『俺は…お前を信じる。今のお前が昔のお前に戻る事を…だから…』

頑張れよ、鷹紀』

「雅斗!…!

影は歪み、そして消えた。

「う、うわああああああ!—!」

鷹紀はその場に崩れ落ち、叫んだ。

『信じてるぞ…鷹紀』

その時、聞こえるはずのない声が鷹紀の耳に届いた。

「……僕は…」

鷹紀は起き上がり、そして走りだした。

「うおおおー!—!」

一人の兵士がロープを纏つた男に切り掛かる。

「邪魔なんだよ」

剣が男に届く前に兵士は吹き飛ばされた。

「君ら邪魔、俺は早くファヌエル城に行って、王様達を殺したいん

だから」

「ならば、我らを倒してからにしる！…」

「ヴァロン王達には指一本触れさせん！…」

前方から兵達が迫るが、男は手の平で何かを弾き、兵達を吹き飛ばした。

「弱つ！もついいから…死ね」

男は両手をおもいつきり空氣中に叩きつけ、何かを弾いた。

「くつ」

「あ、ああ」

兵達の顔が恐怖に支配された瞬間だった。

鷹紀が田の前に現れ、それを防いだ。

「…」

ローブの男の表情が少し変わった。

「はあはあ…。間に合つて良かつた」

酸欠で倒れそうになる鷹紀を兵達が支えた。

「君！大丈夫か！！」

「え、ええ、なんとか」

荒い息遣いで鷹紀が言う。

「ふうん、何君？どうやって俺のプシュケを防いだわけ？」

「え？」

俺の声に鷹紀は余り反応出来なかつた。

「だから…どうやつたのか見せてみろつての…！」

瞬間、俺は何かを弾いた。

「くつ！」

その途端、鷹紀は両手を突き出し、それを防いだ。

「…へえ、君もプシュケ使うんだ。でも、まだ成り立てみたいだね

！」

男が迫り、回し蹴りを繰り出す。

だが、鷹紀はその方向に手を持つて行き防いだ。

俺は距離を取つて鷹紀を見た。

「ほつほつ、手と足の間に何かの層が出来た。それで防いでいるみたいだね」

男は右手に力を込めた。

「じゃあ、どこまで防げるのか試してみるか……」

刹那、男の右手から巨大な何かが弾かれた。

「……！」

それを両手の前に出来た層で防ぐ鷹紀。

するとそこには、巨大で透明な盾のような物がうつすらと見えた。「それが、君のプシュケか！面白い！もっと、もっと見せてくれ！」

！」

立て続けに男は攻撃をした。

「う、うおおおおーー！」

叫ぶ鷹紀。

その想いに応えるかのように盾は、より厚く、より巨大になった。

(雅斗！力を貸してくれー！)

「うわあああああーー！」

砂煙が舞い、辺りは見えなくなつた。

「死んだかな？」

男は眼を凝らし先程まで鷹紀がいた所を見た。

するとそこには、無傷で立っている鷹紀がいた。

「ほう、あれだけくらつて立つてているのか…。いいね、じゃあ次だ」

そう言って男はかまえた。

だが、先程の攻撃を防いだ事で力尽きたのか、鷹紀は倒れた。

「あら、もう終わりか。つまんないの、じゃ死ね」 鷹紀に近づ

こうとする男の前に兵達が立ちはだかるが、男は関係無しに吹き飛ばした。

「バイバイ、ちょっとは楽しかったよ

男の足が鷹紀の頭に落とされた瞬間、男は誰かに蹴り飛ばされた。

「ぐぼおー！」

地面に転がる男をラルラが見下ろした。

「バイバイじやねえよ。こいつはアタシのダチだからな、そう簡単
に殺させはしねえ」

その声は怒りに震えていた。

「玖潟先輩！」

「葵…君？」

「大丈夫ですか！？」

「はは…何とかね…」

懸命に笑おうとする鷹紀だが、その様子はどう見ても限界だ
った。

「葵！鷹紀達を連れて避難しろ！こいつはアタシがやる」

「分かった、気をつけてね」

「ああ」

静かに、だがはつきりとした殺意でラルラがまえた。

一方、その頃時雨は…。

「弥蒼くん？ だつたつけ？」

「…何だ？」

昼の休憩に入った時雨に店員が話しかけた。

「えっと、ミレイさん知らないかい？ 買い出しに行つたきり見かけ
なくて」

「…知らん」

「うーん、まだ買い出しに行つてるのかな？ ねえ、悪いんだけど搜
して来てくれないかい？」

「断る」

「頼むよ、今仕込みの最中だから手が離せないんだ」

「…分かったよ」

渋々、立ち上ると時雨は店を出て行つた。

「……」

キヨロキヨロと周りを見渡しながらミレイを捜していると、裏路

地の奥で三人の男達がミレイを囮んでいるのを見かけた。

「ちょっ、離して下さい！」

「いいじゃねえか。ちょっと来てくれればいいんだよ
嫌です！」

「たくっ、おとなしくしろ！」

ミレイの腕を掴んでいた男が腕を振り上げた。

「…っ！」

ミレイは覚悟をして眼をつむったが、いつこうに腕が降ろされる事はなかつた。

「…？」

恐る恐る、眼を開けると男の腕を掴んでいる時雨がそこにいた。
「女一人に男三人は見苦しいぞ」

時雨は腕を捻つた

「いでででで」

「…離れろ」

男の首を掴み後ろに引き、ミレイから離した。

「時雨…さん」

「帰るぞ」

「あ、はい」

ミレイを先に行かせ、路地から出て行こうとした時だつた。

一人の男が木の棒を時雨に振り下ろした。

だが、時雨は最小限の動きで回避すると男の顔面に拳を叩き込んだ。

「ごおつ！」

鼻の折れる音と共に男は地面に転がつた。

その瞬間、背後にいた三人目の男が時雨の頭に大きな石を振り下ろした。

「…がつ！」

ゴンッと鈍い音がすると時雨は頭から血を流し倒れた。

第十六話・紅

地面に横たわる時雨を男達が囲む。

「この野郎、ただじやおかねえぞ」

「ぐつ……貴様ら」

「寝てろ……」

男が時雨の脇腹を蹴つた。

「かつ……は……」

「オラッ……」

「死ねつ……」

男達は次々に時雨を蹴つたり殴つたりした。

「や、止めて下さこ……」堪らず、ミレイは男達と時雨の間に立つた。

「もういいでしょー止めて下さこ……」

「つむせえつ……」

男の平手がミレイに当たった。

「……」

「お前はお前で後でたっぷり可憐がってやるからそこで大人しくしてろ……！」

男達は倒れたミレイにそつまつと時雨の首を掴んだ。

「お願い！止めて……時雨さん……」

男の手に力が入る。

「……が……あ……」

(俺は……死ぬのか？……この世界で……まあ、それでもいいか……こんな人生……)

《本当にいいのか？》

(……はは、お前か……)

《本当にここのか？》

(…ああ、いいね。もう、疲れたんだ)

『真実を知らずにか?』

(…真実?何の真実があると言つんだ)

『この世界に来た真実…』(…どうでもいい事だ)

『そして、汝の親の死の真実』

(…！…どういう事だ!)『知りたいか?』

(ああ、知りたいね。こんな世界の事なんてどうでもいいが、それだけは知りたいね)

『ならば、戦え。この世界で…真実を知りたくば戦い続け、そして生きる。その先に真実がある』

(だつたら、生きてやるさ。何の力もない俺だが、やつてやるさ)

『…その覚悟…いいだろ?。我が力…汝に貸そう…。我が血の力を…』

(血の?)

『…真の支配を…た…呼べ…名を…は…ン…』

(お、おい!まだ、聞きたい事が…!…)

『…ル…志……げ』

「…つ…はあ」

(も、戻つて…來た…のか?)

「ほらほら、死ねよ早く」男の力が更に強まつてゆく。

「…誰…が…死ぬ…かあ!」

力を振り絞り時雨の手が男の腕を掴んだ瞬間、男の手首が落ちた。

「へ?…あ、ああ…あああああ…!…」

「お、おい大丈夫か!…?」

「手があ!…手があ!…」

右腕を押さえ男はうずくまつた。

「テメエ!…」

途端にもう一人の男が殴りかかるが、時雨は避けると脇に回し蹴

りを放つた。

「う「」つ！」

「…貴様は後だ」

「「」のつ！」

更にもう一人迫るが、時雨の手が首を掴み後方へ投げ飛ばした。

「さて、貴様からだ」

「ひつ！」

時雨は手首を無くした男の胸倉を左手で掴むと右手に力を集中させた。

（力の使い方が頭の中に流れこむ）

時雨の体中に流れ出ている血が右腕を伝つて行き一つの塊になつた。

「…」

そして、その塊はナイフへと形を変えた。

「おまつ！まさか、プシュ…」

「…黙れ」

時雨の持つ真紅のナイフが男の喉を裂いた。

「嫌つ！」

あまりの光景にミレイは眼を逸らした。

「つ！プシュケ使いかよ、テメエ」

「関係ねえ、殺してやらあ！！」

男二人は落ちていた木の棒を掴んで叫んだ。

「…やつてみろ」

ナイフは液体化し時雨の体の中へと入つていった。

「へつ、觀念したか？」

「…ほざけ」

時雨は右手を先程死んだ男に向かた。

「貴様らに見せてやる血の力を…」

「んだとつ！！」

「…主無き血どもよ、汝らが新なる主は我なり。我が命に従い、舞

い踊れ！」

瞬間、先程死んだ男の体中から血が噴き出し時雨の右手に集まつた。

「ひ、ひいいい！」

「ば、化け物が！」

「…なんとでも言え

その血は形を変え、真っ赤な剣へと姿を変えた。

「ぐ、このお…！」

男が一人、時雨へと迫った。

それを見た時雨は男に剣を向けた。

刹那、剣の刀身が伸び男の胸元を貫いた。

「か…は…」

「…終わりだ」

時雨は剣を上に振り上げ男の胸元から上を切り裂いた。

「…来い」

その言葉と共に時雨の左手に男の血が集まつた。

「さあ、後はお前だけだ」

「く…来るなあ…！」

突如、男は駆け出しミレイを人質に取つた。

「き、來たら…この女を殺すぞ……！」

「し、時雨さん…」

「…やつてみる」

ゆつくりと時雨は男との距離を縮めた。

「来るんじやねえ……！」

男の両手がミレイの首を掴む。

「…あ…か…」

「…」

それでも時雨は足を止めなかつた。

そして、その距離五メートル…。

「…貫け」

時雨がボソリと言つた瞬間、左手にあつた血の塊から一つの針が高速で伸びた。

「……」

その速さは男の反応を鈍らせ、頭に突き刺さつた。男はその場に崩れ落ち、死んだ。

「大丈夫か？」

時雨の力が消えたのか、両手にあつた血は地面へと流れた。「は、はい。ありがとうございます」と言つた

「……」

時雨は無言で手を差し出した。

「あ、どうも」

ミレイは手を握ると立ち上がつた。

「お前、平氣なのか？」

「何ですか？」

「いや、いい」

時雨はミレイから手を離すと、両手にまた血を集めた。

「ここでの事は忘れる。それと、もう店には戻らない……分かったな

「……分かりました。時雨さん、死ないで下さいね

「……ああ

「それと、今度はお客様として来て下さいね。私、待つてますから」

屈託のない笑顔でミレイは言つた。

「お前

「恐くなんかないですよ。だって、時雨さんは私を助けてくれた人ですか？」

「…今度、店に密として行かせてもらひつ」

「はー！」

時雨はそう言いつと同時に手に意識を集中させた。

「たぎれ血よ」

血はまるで蛇のよつと時雨の周囲をうねりめき、背中に大きな羽を作つた。

作つた。

「時雨さん、また今度」

「…ああ」

羽を羽ばたかせ、時雨は戦場の方へと飛んで行つた。

「立てよ」

ラルラは地面に倒れている男に言つた。

「…野蛮な人だ」

土埃を払いながら男は立ち上がつた。

「…！…そのローブに…さつきは、いきなりだつたから氣付かなかつたが。テメエ…セビュルか」

「へえ、俺の事知ってるんだ」

セビュルと呼ばれた男は驚いた様子だつた。

「ああ、この大陸でテメエの名前を知らねえ奴はいねえ……なんたつて、プシュケで人体実験をしてる腐れ野郎だからな！！！」

「おいおい、何を勘違いしてるんだ？人体実験なんかしてないさ。ただ、無能な民達を俺なりに活用してあげているだけさ」

セビュルの言葉にラルラの怒りが高まる。

「テメエみてえな奴がいるから！！」

瞬間、ラルラは獣人化しセビュルに襲い掛かつた。

「何年も経つた今でもプシュケを恐がる奴らがいるんだよ！」

ラルラの右腕がセビュルに迫る。

しかし、セビュルは後ろへと避けると、両手で何かを弾いた。

「がはつ！」

腹部に直撃し、ラルラはよろけた。

「そ、そういうやあ、テメエのプシュケは空氣を弾く力だつたな。忘れてたぜ」

「当たり～、まあ、でも知つてもどうにかなるもんじやないしつ！」

瞬間、セビュルは両手から無数の空氣を弾いた。

「ざけんなつ……」

ラルラは右に跳ぶとセビュルに向かつて駆け出した。

「甘いよ」

それを見たセビュルはすぐに方向を変え空氣を弾いた。

「どこがだあ……」

ラルラのスピードが加速する。

セビュルが気付いた時には、もうすでに懐に入っていた。

「ぶつ飛びやがれえ……」 ラルラの右手がセビュルに触れる瞬間、
セビュルは空氣をラルラの右手に弾いた。

ぶつかり合う衝撃。

力の差はほんの少しラルラが勝つた。

「ぐう！」

吹き飛ばされたセビュルは何とか転ばずに立つた。

「このつ」

「遅え」

顔を上に上げた途端、ラルラの蹴りがセビュルの顔面に入つた。

「がはっ！」

地面に転がるセビュルにラルラが追い撃ちをかけようとした時だ
った。

地面から人が出て来たのだ。

「……つ！」

足を止めるラルラの視線の先には先程までいなかつたはずの男が
いた。

「だらしがないです、セビュルくん」

「何だ、シャムか」

シャムと呼ばれた男は他の人とは違ひ軽装な格好をしていた。

「私が手伝いましょう」

「余計なお世話だといいたいけれど、そもそも言つてられないな」

その言葉にシャムはニヤリと笑うと両手をラルラに突き出した。

「さあ、来なさい」

シャムの声に反応するかのようにボロボロと音をたて、地面から何体もの土で創られた人形が出て來た。

「ハツ！上等だ！」

かまえるラルラに人形達が襲い掛かった。

獸人のスピードで人形達の攻撃を避けつつ、爪で切り裂くラルラだったが。

切り裂こうが、殴ろうが土には関係がなかつた。

人形の拳がラルラの腹部に直撃する。

「がつ！」

「こつちもいるからね」

セビュルの弾いた空気がラルラに追い撃ちをかける。

「…くそつ…！」

すぐに体制を立て直そうとするが、人形達がラルラを次々に殴り、蹴つた。

「…か…は…」

「ほらほら、次だ」

ラルラの頸に弾かれた空気が当たる。

「…ぐはつ！」

吹き飛んだラルラは地面に俯せになつたままピクリともしなかつた。

(…カティア……ヤベエ、意識…が)

薄れゆく意識の中、ラルラが見たのは真つ赤な何かだった。

第十七話・覚悟

「誰？」君
セビュルとシャムの視線の先はラルラではなく、今しがた上空から舞い降りて来た時雨に向けられた。

「…わあな」

時雨は羽を碎くとラルラの方を見た。

「…おい、生きてるか」

「…弥、蒼…か？」

「ああ」

「…はは、ふさまな…つ…ところを見せつけましたな」 無理矢理起

きよひとするラルラを時雨は止めた。

「…足手まといだ」

「テメ…」

「”今は”な

そう言つて時雨はセビュル達の方へと走った。

(はは…今は、か)

ラルラは少し悔しそうな表情をして、時雨を見た。

「お、話しあは終わったのかい？」

「…ああな」

「つれない…なあ！…」

瞬間、セビュルは空気を弾いた。

しかし、時雨はそれを簡単に避けセビュルとの距離を詰めた。

「…来い」

時雨の両手に先程の血が集まり、剣となつた。

「させません」

何体もの土人形が時雨の前に現れる。

「…邪魔だ」

剣を振り薙ぎ払つ時雨。だが、先程のラルラと同様で意味はなかつた。

「ちい！」

人形の攻撃を血を盾に変化させ防ぐが限界があるのは明らかだつた。

「ひつちもいるぞ！」

セビュルの猛攻が時雨に迫る。

「…がつ！」

「置みかけなさい」

人形達が時雨へと殴りかかった。

（くつ、数では圧倒的に不利だ。どうする？）

時雨は敵の攻撃をかるづじて防ぎ、避けながら考えた。

（…またよ、確か…）

何かを思った時雨は、距離を取つた。

（この力の操る範囲は五メートル…。だが、呼ぶ力ならその範囲は倍以上だつたはずだ…）

時雨の両手に意識が集中する。

「…目覚めよ血…我が命に従い、奴らを滅せ！」

瞬間、土の中から赤い粒状の何かが幾つも現れた。まるで、時雨の声に反応したかのように…。

「何だ？これは？」

「…まさか！？」

「…当たりだ」

驚くセビュル達に時雨は言った。

「これはこの辺りで死んでいった人間から流れ出、地中へと呑まれていった…血だ」

空中に散布した血が時雨の手に集まってゆく。

「…たぎれ血よ」

血がうごめき、時雨の両腕に纏わり付いてゆく

「さて、殺るか」

時雨は残りの血を剣にし片手ににぎると一人に向かって行つた。

「少し驚きましたが、数ではこちらが上です」

シャムは土人形を時雨へと向かわせた。

「… そうかな」

「何？」

「舞え血どもよ」

刹那、両腕にあつた血が液体化し、時雨の周りを高速で回転し始めた。

「なつ！？」

「… 散れ、人形ども」

時雨の周りの人形達が切り刻まれ塵となつていった。

「くつ！」

「… セテ、どうする？」

「こうするねつ！！」

バシンッと何かが血の渦に当たつた。

「俺がその壁を貫く」

セビュルの弾いた空気が渦に当たる。

「… 無理だな」

「どうか… ぐほつ！」

瞬間、ラルラの飛び蹴りがセビュルに直撃した。

「… 来たか」

「コイツはアタシに任しどきな」

「あ… 死ぬなよ」

「誰に言つてんだよ」

その言葉に時雨は微かに笑いシャムに突っ込んだ。

「ちい！予想外でした！」 時雨の行き先に何体もの人形が現れた。

「… 無駄だ」

血の渦が人形達を蹴散らす。

「ならば！」

シャムは両手に力を込めるとい二メートル程の分厚く巨大な土人形

を一体、作り出した。

「どう…です。これ…ならば…はあはあ、切り刻む事は…出来…ませんよ」

荒れた息遣いで勝ち誇った様に言った。

「……」

「フフ、あまりの…事に言葉が出ま…せんか？」

「…ああ、貴様がバカをやつてくれたおかげでな」

「負け惜しみを！！」

人形が時雨に拳を振り下ろした。

だが、時雨はそれを血の盾で防ぐと右手に血を集めた。

「…終わりだ」

時雨は体を右に捻ると、勢いよく地面に右手を叩きつけた。

「…貫け」

巨大な槍が人形を下から一直線に貫き、全体から無数の槍を出すと人形をボロボロに崩した。

「なっ！？くそっ！」

「無駄だ」

時雨は新たに人形を作ろうとしたシャムに剣を突き付けた。

「くつ」

「もつとも…先程の巨大な人形を作ったせいで、もう力を使う体力が無いのは明白だがな」

「…ちくしょお」

核心を突かれたのか、シャムはその場に崩れ落ちた。

「…今回の兵力…貴様の仕業だな。普通でも百万など有り得ない数字だ。おおくても一萬程だ」

「…ハ、ハハハ…気付いていのか。あの兵の大半は私が作った人形だと」

「…ああ、貴様の力を見た時もしゃと思つたさ」

時雨は静かに腕を振り上げた。

「貴様の王と王子はあの山の近くだな？」

「… わあ？」

「だらうな」

時雨の腕が振り下ろされた。

「…あの山の近くか」

背中に羽を作る時雨は一気に飛んでいった。

「ペツ、この野郎が」

ラルラは血の混ざった唾を吐くとセビュルに突っ込んだ。

「無駄無駄！！」

セビュルの弾いた空気がラルラに迫る。

それをラルラは獣人化し避けようとした。

だが、まだ体にダメージが残っていたのだろう、そのスピードは遅くなっていた。

「そこつ！」

巨大な塊の空気がラルラに直撃した。

「…がつ…ぐ…」

(ヤベエ…アバラが一、三本いつた)

「死ねえ！！」

先程よりも巨大な塊をセビュルは放った。

(…クソッ…こんな所で…こんな所で…死んで…)

「たまるかあ！！！」

ラルラの右手が空気の塊に叩きつけられた。

「ぐ…うおおお…！」

叩きつけた時の力が弱かつた為か、ラルラは押されていた。

「こんな奴らに…」

ラルラの足が一步前へ出る。

「カティアを…」

右腕からは血が噴き出していた。

「ば、馬鹿な……」

セビュルは驚いた。

徐々にではあるがラルラの右腕が塊を押し返していたからだ。

「渡してたまるかあ……」 巨大な空気の塊をラルラは跳ね返した。右腕を代償に……。

「くそつ！」

「おせえ……」

瞬間、ラルラの左手の爪がセビュルの心臓に突き刺さった。

「ち……く……」

爪を引き抜くとセビュルは倒れた。

「はあはあ……アタシの覚悟を……嘗めんなよ」右腕を抑えラルラはその場を去った。

上空を飛んでいた時雨の視界に一つの陣が映った。

「……あれか」

時雨は一気に急降下し、陣に突っ込んだ。

「な、なんだ……！」

「敵襲か……！」

「王と王子をお守りしろ……！」

砂煙が舞う中、口々に兵達が言った。

そして、数秒後。

砂煙が晴れたその場には一人の人間を囲む様にして陣が作られていた。

「何者だ！貴様！」

隊長格の男が時雨にそう言った。

「……さあな」

「空から来たという事は、貴様能力者だな」

「だったら、どうする？」 兵士達の構えに力が入る。

「王達には指一本触れさせんぞ……！」

途端に兵達が時雨に迫つて來た。

「…邪魔をするな」

それを見た時雨は、地面に右手を叩きつけた。

瞬間、地面から無数の槍が飛び出し兵士達の体を貫いた。

「ぐぼつ…」

「があ…」

「ぐおつ…！」

次々と倒れる兵達の横を時雨は歩き、男の前に立った。

「…貴様か？この戦争の引き金のアーマスとか言つ國の王は「
だ、だつたらどうだと言つのだ！…」

男はかなり動搖した口調で答えた。

「き、貴様こそ！な、何だ！ぼ、ぼ、僕の恋路の、じゃ、邪魔をす
るな！」

すると、隣にいた小肥りの子供が時雨に指を指して言つた。

「ぼ、僕はアーマス国のお、王子だぞ！…き、貴様みたいな、しょ、
庶民に…」

「黙れ

血の槍が王子の喉元に突き付けられる。

「ぴいいい！…！」

泣きわめく王子を無視し、時雨は王に刃を向けた。

「いまでぐ、兵を退かせろ

「ふん、断る…！」

「何？ーつ…！」

その時、時雨の背中に悪寒が走つた。
すぐさま、後ろを振り向いた瞬間…。

「ぐうつ…！」

強烈な一撃が時雨を襲つた。

第十八話・終戦（前書き）

だいぶ遅くなつてしまひました。すみません

第十八話・終戦

殴り飛ばされた時雨が顔を上げた視線の先には、真っ黒なロープを着た男が立っていた。

「お、おお！－何者か知らんが助かつたぞ！－」

安堵の表情を浮かべ駆け寄る王だったが…。

「…近寄るな」

男が王に手をかざした瞬間、王は上から押し潰されるかの様にその場にはいつくばつた。

「ぐおつ！－き、貴様！」

「ち、父上」

「一度と、俺に寄れない様にしてやるよ」

瞬間、鈍い音をたてて王の両足が有り得ない方向に折れ曲がった。

「ぐああああ！－」

「ひいいい！」

その光景を見た王子はその場にへたりこみ、股間を濡らした。

「…さて」

男は振り向いた先…。

そこには、両手に剣を持つた時雨がいた。

「…何者だ貴様」

時雨が男に聞いた。

「さあな…だが、確かに言えるのは、このクズ共の仲間の仲間ではないということだ」

「…どうか」

「…だが、貴様の敵でもあるがな」

刹那、男は時雨との距離を縮めた。

「ちつ」

それに反応した時雨は右手の剣を振るつが、男も腰の鞘から剣を抜き取りそれを防いだ。

「…甘いな」

防がれた瞬間、時雨はもう片方の剣を振り、腕を上げた時だつた。

時雨の剣が急に重くなり、手から滑り落ちた。

「なつ！」

「…隙有り」

男の蹴りが時雨の腹部に直撃した。

「ぐつ！」

男の蹴りが時雨の頭部に回し蹴りが入る。

「かつ！」

「…潰れろ」

男が手をかざした途端、時雨の体中が重くなり、その場に倒れた。

「ぐうううう…」

「…この重さに耐えるか…。なら、もっただ

時雨の耳にミシミシと骨の軋む音が聞こえた。

「…つ…ふ…ざけ…る…なあ…！」

時雨の叫びに反応した血が男の足元から槍になり飛び出す。

「ちい！」

男はそれをバックステップで避けた。

「死んで…たまるか…。貫け！…」

無数の血の槍がまるで波打つ様に男へと放たれた。

「…潰れろ」

だが、それは男に届く前に全て潰され砕け散った。

「…何者だ。貴様は」

「…」

軋む体を支えながら、時雨が聞くも男は答えない。それどころか、剣を握り再度時雨に迫つて来た。

「…来い」

(奴と接近戦をすると、こちらが不利だ)

辺りの血を集め、時雨は巨大な壁を作った。

(今のうちは距離を…)

刹那、壁は無惨に押し潰され男は時雨のすぐ後ろに迫つて來た。

「あつーなりばー！」

時雨は両手に残った血を液体化させ、自分の周りに高速回転せると立ち止まつた。

「こいつでどうだー！」

振り向き、男の持つ剣を弾いた。

「確かに…少し厄介だな」 男は両手を時雨にかざした。

「だが、関係ない。…潰れる！」

ズシンと時雨の体が地に押し潰される。

「く…お…

「…潰れろ、その内なる存在と共に」

男の言葉に時雨は反応した。

「貴様…奴を…ぐつ…知つて…いるの…か」

「ああ、貴様以上に知つてているぞ。その存在も、何故貴様の中にいるのかも」

「…何…だと…ぐあつー！」 更なる激痛が時雨を襲つた。

「…お喋りは、ここまでだ。…死ね

「ぐあああー…！」

眼や口から吹き出す血。 そしてまた、体中が裂け、血が溢れ出ていた。

(ふ、かけるな。やつと、糸を掴んだんだ。父さん達の…。
だから…死んで…たまるか…死んで…)

「た…まる…かあーーー！」 瞬間、血の槍が男のかざしていた右手をかすつた。

「！？」

いきなりの事にたじろいだ男は時雨から距離を取つた。

「たまるか…死んで…たまるか…」

その隙に立ち上がつた時雨だったが、その体はもうボロボロで立つてゐるのがやつとだつた。

「ちつ、大人しく潰れていろっ！！」

男が左手を時雨に向けた瞬間、今までとは桁違いのスピードの血の槍が男の左手を貫いた。

「なつ！？」

（速い！）

男がそう思つた途端、次の攻撃が既に男へと迫つた。

「くつ！」

からうじてそれを避け、体勢を直した男の視線の先には血で出来た人形が三体、迫つて来ていた。

（くそつ、何だコイツは。さつきとはまるで別人だ） 男は人形へと右手をかざした。

だが、その右手は地中から出て来た血によつて手首を繫がれ固定された。

「しまつ！！」

その瞬間、二体の人形は男の体に取り付くと液体化し拘束した。

「…貫け」

時雨の声に反応した三体目の人形が、その形を槍へと変え男を貫こうと迫つた。

だが、寸前のところで槍は血に戻り、男の拘束も又解けた。

「…氣絶したか」

男は地面に倒れてた時雨を見て、そう言つた。

「…やはり、貴様は危険だ。死ね、その内なる者と共に」

男が時雨に手をかざした瞬間、上空から何かが男を襲つた。

「くつ！」

男は辛うじてそれを避けるとその方向を見た。

そこには真っ黒な羽を生やした一人の男がいた。

「…ファヌエルの者だな」 男は上空から降りて来た男にそう言った。

「ああ、そうだ。ファヌエル城、一番隊隊長、ソルウェ・ラバンだ」

ソルウェは男に剣を向けた。

「貴様は何者だ。見たところ、我が國の者でもアーマスの者でもないようだが」

「…さあな、俺はただそこにいる奴に用があつただけだ」

男が指さす先にいた時雨の姿にソルウェは息を飲んだ。
余りにも生きているのが不思議なくらいの出血に傷や打撲が体中にあつたからだ。

「…っ！貴様！」

ソルウェは男に切り掛けられたがそこにはもう男はいなかつた。

「…逃がしたか」

そう言つてソルウェは時雨に近づいた。

「おいつーおいつー！」

「…う…あ…」

「よし、まだ意識はあるな。次は…」

ソルウェはポケットを『そごそと漁り、細長い紐付きの筒を取り出した、

そして、それを引っ張ると上空に赤い煙りと共に爆発音が鳴り響いた。

「これで、戦争が終わる」 ソルウェの視線の先には両足を折られ、地面にはしつぶばる王と股間を濡らしたまま氣絶して居る王子の姿があつた。

第十九話・記憶

「父ちゃん……母さん……」

「時雨……」

リビングに響く幼い声。そして、それに答えるかのよひに一人の女性が叫んだ。

「待つてろ！今つ……！」

「！？ 駄目だ！父さん……！」

一人の男性が幼い少年に手を伸ばそうとした。だが、その手は無惨にも切り落とされた。

「ぐあああ……！」

右手を押さえ倒れ込む男性。

「父さん……くそつ、このつ……」

幼い時雨はなんとか抵抗するもびくともしなかった。

「母さん……逃げてつ……！」

「あなたを置いて逃げれる訳がないでしょう……！」

「でもつ……！」

その時、女性に向かつてナイフが投げられた。

「きやああ……！」

「母さん……！」

しかし、それは女性の右頬を掠め、壁に刺さった。

「し……時雨……」

男性はようよようと立ち上がり、時雨へと近づいた。

「来ちや駄目だ……父さん……！」

「今……助けて……やる」

「止めて！来ない……！」

瞬間、男性の胸にナイフが突き刺さった。

「く……あ……」

「あなた……！」

「父さん……」「

よろよろとその場に崩れ落ちた男性に、ナイフの刃が光る。

「避けて！父さんっ！……」だが、時雨の声は無情にも響くだけであり、ナイフは男性の背中に刺された。何度も、何度も……。

「ど、父さん……？」

「……」

「父さん……！」

「あなたあ！……」

「父さん！……うわあああ……！」

叫ぶ、時雨。

「あ……あ……」

女性はあまりの光景にその場に泣き崩れた。

「母さん！……逃げて！……」途端に、時雨が叫んだ。だが、女性は動けず、泣いていた。

「母さん……！」

ズブリと女性の喉元にナイフが刺さった。そして、何度も体中に傷痕を作つた。

「嫌だ……嫌だ……嫌だああ！……」

血に濡れたナイフは時雨の手に……。

「うわあああ……！」

「……っ！……？」「

カバリと時雨はベッドの上で起きた。

「……はあはあ……夢、か」「

荒い息をたて、時雨は額に手を置いた。

「……くそつ」

頭を振り、時雨はベッドから降つよつとした。

「？」

だが、足に重みを感じ不思議に思い見ると、葵、鷹紀、華音の三

人が寄り添う様に寝ていた。

「何故、こいつらが？と、言つか」「ま？」

キヨロキヨロと辺りを見回すと、そこはどつ見ても医務室だった。

「…たしか…あの男と戦って、殺されそうになつて…それから…」

何とか、その先思い出そうとする時雨だが、記憶が無いのか思い出す事が出来なかつた。

(俺は…どうやつて助かつたんだ?)

頭を抱え、考え込む時雨だが、全くと言つていい程思い出せないでいた。

「…ふう」

(まあ、いい。今、生きている…それだけでいい)

一つの結論に達し、少し疲れた様に時雨はため息をついた。

「…ん…うん…」

「…?…起きたのか

「あ、時雨え？」

「…ああ」

まだ眠そうに臉を擦りながら、ムクリと葵が起き上がつた。

「あれ? 時雨? ……ああ!…」

突如、葵が大声をあげた。

「ちょっと、二人共、時雨が起きたよ!…」

「…え?…何だい?」

「ふあ?…へ?」

寝ぼけたように起きた二人は臉を擦つた。

「それにしても、よかつたよ時雨君が眼を覚ましてくれて」
医務室のテーブルでお茶を飲みながら鷹紀が言った。

「そ、そ�ですね。三日も寝てましたから、心配しました

「…そんなに寝ていたのか?俺は…」

「ええ、そりゃもう、ぐっすりと」

同じくテーブルに座っていた華音と葵が答えた。

「… そういえば、体中にあつた傷が無いんだが」

「ああ！ それはね、華音が治したんだよ」

「… お前がか？」

時雨の視線が華音に向けられた。

「あ、はい」

「もちろん、プシュケよ」

「… だらうな。やつじやなければ、あれだけの傷を治すのは無理だ」

「ちなみに、あたしと玖潟先輩もだよ」

葵の言葉に時雨は少し驚いた。

「…？」

その様子を見た鷹紀は首を傾げた。

「時雨君… もしかして君もかい？」

「… ああ」

「… ! … そ、うか」

驚いた鷹紀は時雨を見た。

「でも… この世界の住人じゃない、あたし達がビジウして？」

「分かりません。ラルラさんの話だと、プシュケ自体が、まだよく分からなって言つてましたし」

華音の言葉に時雨を除いた三人は唸り、考え始めた。

その時、医務室の扉を誰かがノックした。

「失礼します」

入つて来たのはドレスに身を包んだカテイアだった。

「あ、カテイア。時雨が起きたよ」

「え！ そうですか、よかつた」

カテイアは安心したように笑うと、時雨のいるベッドの立つた。

「時雨さん、今回は成り行きとはいへ、ありがとうございます」

「… 気にするな、俺が選んだ事だ」

頭を下げるカテイアに時雨は言った。

「はい、ありがとうございます。華音さんも、本当にありがとうございます」

いました

「止めてよ、カティア。あたし達、友達じゃん」

「うん、そうだよ。カティアちゃん」

「はい、分かりました」

カティアの笑顔につられ、二人も笑顔になった。

「ところで、カティアさん。何か僕らに用があつたんですか？」

鷹紀の言葉にカティアは頷いた。

「はい、実はパーティーがあるんです」

「パーティーですか？」

「はい、恥ずかしながら私の父は大の祭好きなので、今回の勝利、そして命を落としていつた兵達の供養も兼ねてパーティーをしようと」

カティアの言葉に葵達、三人は喜んだ。

「本当ならばもう少し先なのですが。時雨さんが予定よりも早く覚めたので……そうですね、明後日辺りにはすると思います。皆さんも準備をお願いしますね」

「了解」

葵が手を上げて嬉しそうに返事をした。

「では、私は父に報告してきます」

そう言って、カティアは医務室を出て行つた。

第一十話・宴

ガヤガヤと大広間に人が集まつてゆく。

「はへへ、すごい人の量」

「うん、そうだね」

ドレスに身を包んだ一人にタキシード姿の鷹紀が近づいて来た。

「やあ！」「人共、綺麗だね」

「ありがとう、先輩。カティアに借りたやつだけどね」

「ううん、よく似合つてるよ。葵君も華音君も」

「は、はい。ありがとうございます」

顔を真っ赤にし、もじもじと華音は答えた。

「先輩のその服はどうしたんですか？」

「ん？ああ、これはクラルトさんが持つて来てくれたやつなんだ」

「へえ～、よく似合…」

「よく似合つてます！！先輩！！」

葵の言葉を遮り、華音が言った。

「はは、ありがとう」

少し驚いた様子の鷹紀だったが、すぐに笑顔になりお礼をいった。

「あれ？ そういえば、時雨は？」

鷹紀が一人だった事に葵は不思議に思つた。

「え？ えっと、彼は…」

「まさか、来ないとか？」

「はは、最初はね、そう言つてたんだ。けど…」

「けど？」

「なんだか知り合いみたいな人が来たんだ。そうしたら、いきなり

行くつて言ひだして」

鷹紀の言葉に二人は驚いた。

「まさか、あいつを動かせる人がいたなんて」

「だよね、ちょっと凄いかも」

すると、三人の所へ一人の人影が近づいて來た。

「あ、弥蒼さん？」

「……」

「あんた本当に時雨？」

「……ああ」

三人は驚いた。

確かに時雨自身は、それほど格好悪くはない、むしろ格好良い部類に入る程だ。

眼にかかる程度の前髪に全体的に少し長めの髪、眼も大きめで、どこかハーフの様な印象を受けるの顔立ちは、素材としては申し分なかつた。

とは言え、今の時雨変わり様は凄かつた。

タキシードに身を包んだその雰囲気はいつもと違い、どこか大人の雰囲気があつたのだ。

「はあ～、あんたも変わるもんねえ」

「…どこかのババアかお前は」

まじまじと見る葵に時雨がツツコンだ。

「はは、ねえ時雨君、そちらの人は？」

鷹紀の視線の先にはドレスを着た女性がいた。

「…ああ、こいつは…」

「初めてまして、ミレイ・マタニスと申します」

そう言つてミレイは頭を下げた。

「あ、玖潟鷹紀といます」

「あたしは、羽原葵よ」

「え、と、深嶋華音です」 三人は順々に頭を下げ、自己紹介をした。

「これはこれは、『丁寧にありがとうございました』ミレイはもう一度、礼をした。

「…」いつには前に助けてもらつたんだ。…まさか、ここにいると思わなかつたがな…」

「ええ、私もです。私の場合、父がこここの厨房の元料理長だったからなんですが。皆さんは？」

「えつと、そうだな…。まあ、カティアさんの知り合いと言つた所ですかね」 ミレイの質問に鷹紀が答えた。

「まあ、カティア様の…。そうでしたの…」

ミレイの表情は少し驚いていた。

「ねえ、ミレイ」

「はい？ 何でじょうか、葵さん」

「お父さんが元料理長つて事は…」

「はい、私も街中で飲食店を経営しております」

「あ、やつぱり！ ねえ、今度食べに行っていい？」

「ええ、構いません。皆さんで来て下さい」

その言葉に三人は笑った。

「じゃあ、近々四人で伺わせてもらいます」

「はい、お待ちしてます」 四人は意気投合したのか、その後も話し始めた。

ただ、そんな中でも時雨は一人輪から外れ、壁際に立っていた。
そして数分後、盛大な音楽と共にヴァロンとフィルナ、カティア
が現れた。

三人は広間の中央を歩き、少し高めにある奥の席に着いた。

「皆の者、静かに！！」

ローレグが声を張り上げた。

「ヴァロン王、どうぞこちらえ」

「うむ」

席を立ち、少し歩いた場所で立ち止まつた。

「皆の者！ まずは、生き残れた事を喜ぼうぞ。そして、死んでいた者達に供養と生きる誓い、感謝の意を込めて祈ろう…。」

シンツと会場が静まり返り、皆が眼をつむつた。

「三分経つただろうか、ヴァロンがスツと手を挙げた。

「さあ、祈りと供養は終わつた。あの者達もしんみりしたのは嫌じ

やろう！天に届く程、大いに楽しもうではないかっ！—
その言葉に、会場は沸き上がり、活気が溢れた。

「こよつしゃあ……食わねえよ……」

血を持ち、意氣込むラルテにクラルトが近づいた。

「…………」明田から通常の訓練があるんですから、あまり食べ過ぎな

三三三お前も食め食め

グラス二重マトリ

「隊長命令だ。飲めやあ！」

いやしかしですね……」

「隊長、解つてますね」

「酔つてねえよ。ほらほら、周りの皆さんもお待ちだあ。」
飲めえ

5

「ちよつ！んぐ！？」 ラルラのグラスのワインが無理矢理、
クラルトの口の中に流し込まれた。

「アハハハハ、いい飲みっぷりだあ！」

高笑いするラルラとは対称にクラルトはフラフラになつた。

「二二」何以謂之

「うん、確かに美味しい」ほつペを押さえ感激する葵に鷹紀はに

「やがて言つた

「うれしい」

「ノイと華音も」機嫌な様子で食事を楽しんでいた。

あれ？ また時雨かしない

すると、ふと葵が思い出した様に言った。
「え？ 弥蒼さんなら…あれ？」

二人の視線の先には先程まで壁際にいたはずの時雨がいなかつた。

「あ、あそこ」

驚いた様子の鷹紀の指差す先には、黒服の男の後を付いて行く時
雨がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264e/>

サイオニクス～～psionics

2010年12月19日00時51分発行